明日の学校をともに考えるベネッセの教育情報誌

全国の校長先生に無料で年4回お届けしています

VIEW21

ビュー21
2013
Vol. 1
小学版

特集 授業で高める自己肯定感

総論　上智大総合人間科学部准教授 **澤田稔**／東京都板橋区立大谷口小学校校長 **倉島民雄**／東京都板橋区立板橋第一小学校校長 **中川久亨**

学校事例　東京都板橋区立板橋第一小学校／埼玉県さいたま市立高砂小学校
岐阜県中津川市立西小学校

展望　文教大大学院教授 **嶋野道弘**

私を育てた あの時代、あの出会い　和歌山県九度山町立古澤小学校校長 **橋村伸爾**

新連載 Benesse発 これからの教育　東京都港区立東町小学校　多文化が共生する教室で進める国際理解教育

つながる 学校と家庭の学び　香川県高松市立川東小学校　「8の字学習サイクル」活動で自主的な学習習慣を育てる

Benesse® 教育研究開発センター　http://benesse.jp/berd/

C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2013

Vol. 1

小学版

特集

3 **授業で高める自己肯定感**

4 総論

自立的に学ぶ過程や成果が認められる経験から自信と主体的な姿勢が育つ

上智大総合人間科学部 **澤田 稔**准教授

東京都板橋区立大谷口小学校 **倉島民雄**校長 ／ 東京都板橋区立板橋第一小学校 **中川久亨**校長

10 学校事例1

自ら考えなければ進まない学習で達成感を経験させて自信を高める

東京都板橋区立板橋第一小学校

14 学校事例2

学びの意味や楽しさを「実感」する授業づくりで自信や意欲を育む

埼玉県さいたま市立高砂小学校

18 学校事例3

子ども主体の学級経営を通して明確な目標意識と自信を育てる

岐阜県中津川市立西小学校

22 展望

存在の平等と持ち味や能力の違いを認め一人ひとりが際立つ授業を

文教大大学院教育学研究科長 **嶋野道弘**

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

語らずとも見ていてくれる姿に信じて待つ大切さを知った

和歌山県九度山町立古澤小学校校長◎**橋村伸爾**

26 Benesse発　これからの教育 新連載

多文化が共生する教室で進める国際理解教育

東京都港区立東町小学校

28 つながる学校と家庭の学び

「8の字学習サイクル」活動で自主的な学習習慣を育てる

香川県高松市立川東小学校

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第12回

語らずとも見ていてくれる姿に信じて待つ大切さを知った

和歌山県 九度山町立古澤小学校校長 橋村伸爾 HASHIMURA SHINJI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、橋村校長が語る。

はしむら・しんじ　専門教科は理科。中学校教師を志すも、県の採用がなく小学校教師の道に進む。中学校教員免許を持つことで中学校にも赴任し、さまざまな経験を積む。粉河町立（現紀の川市立）川原小学校などを経て、現職。

校長の穏やかに諭す言葉に自分を振り返った

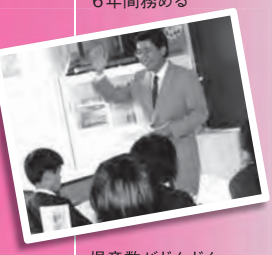
初任校は1学年が1～2学級の小規模校でした。教師は10人程で、50代の3人の他は、20代の若手教師ばかり。私が唯一の若い男性だったためか、新採にもかかわらず体育主任を任されました。ですから、学校の一大イベントである運動会も、1年目の私が前年度の記録を見ながら、計画を立て、子どもに練習をさせ、当日の進行をしました。同僚は同世代だったので、先輩に教えてもらいつつも、とにかく実践。自分たちで何でも取り組み、悩み、協力し合いながら教育活動を進めていました。

そうした教師集団を見事にまとめ上げていたのが、森本芳明校長です。先生は普段は物静かでしたが、私たちが無茶をしそうになるとそっと寄ってきて、「これは少しきついかな」と諭すように言われました。若い時の私は向こう意気が強く、頭ごなしに駄目だと言われたら、たとえ校長でも反論していたと思うのですが、そのように穏やかに言われるとふと立ち止まり、自分の取り組みを振り返ることが出来ました。

1年目の私が体育主任になったよ

*プロフィールは2013年3月時点のものです

- 1979（昭和54）
  新採として粉河町立（現紀の川市立）長田小学校に赴任。若手教師中心の学校で森本芳明校長の下、多様な経験を積む
- 1985（昭和60）
  那賀町立（現紀の川市立）那賀中学校に赴任
- 1989（平成元）
  岩出町立（現岩出市立）山崎北小学校に赴任。宮本裕校長の下、６年生の学年主任を６年間務める



児童数がどんどん増えていく中学年で団結して指導に当たった

- 2004（平成16）
  打田町立（現紀の川市立）田中小学校に赴任。教務主任を務める
- 2007（平成19）
  和歌山市立有功小学校に教頭として赴任
- 2010（平成22）
  紀の川市立那賀中学校に教頭として赴任
- 2011（平成23）
  九度山町立古澤小学校に校長として赴任

My History

「失敗を恐れず自分で考えて取り組むことが力になる」

うに、若手にどんどん仕事を任せてくれる校長でもありました。校庭に遊具を設置することになった時は体育主任ということで1年目の私が計画を立てましたし、2年目には教育実習生の指導教諭を務めたのです。

1校目で教育活動に必要なさまざまな経験をさせてもらったことは、大きな財産となりました。まだ新採研修などが充実していない頃でしたので、現場で自分で考え、実践し、試行錯誤を積み重ねたことが、自分の力になったのだと思います。

その経験は、教師11年目に赴任した小学校で生きました。その学校は赴任中の9年間で児童数が500人から1000人に増え、子どもの転出入が激しく、そのために環境が落ち着かず、荒れの傾向が見られました。私は6学年主任を6回務めましたが、宮本裕校長は学年運営を学年に任せてくれました。普段の学級経営はそれぞれ担任の思いが発揮できるよう見守り、何かあったら担任と一緒に家庭訪問をするようにしました。学年には若手教師も多かったので、指導技術や生活指導、保護者対応など、率先して行いました。私の実践を見て学んでほしいと思ったからです。

恐らく、宮本校長の元にはいろいろな問題が来ていたはずです。それを現場の教師にほとんど言わず、自分で対応されていました。私たちが目の前の子どもの指導に集中できるよう配慮されていたことに、校長としてすべきことを学びました。

子どもが安心して楽しく通える学校を

仕事を任され、自分の考えで進めてきた分、失敗もたくさんしました。中学校で不登校の生徒を初めて受け持った時、私は保護者の学校に行かせたいという思いを優先し、生徒を無理に学校に連れていこうとしました。そのために生徒は心を閉ざし、その後、家庭訪問を何度繰り返しても生徒と会えることはなく、不登校のまま卒業しました。何よりも考えるべきは生徒の気持ちだったはずなのに、私は焦ってしまったのです。

生徒を傷付けたことは今でも申し訳なく思っています。でも、そうした後悔の念があるから、その後、ある不登校の子どもを受け持った時、子どもの心の葛藤に寄り添うことが出来ました。家庭訪問をして、たわいもない話をしたり、保健室に登校したら一緒にバドミントンをしたり。もしかしたら、自分が受け持つ間、その子は不登校のままかもしれません。でも、私は子どもが学校に行きたいと言うまで信じて待ちました。残念ながら小学校はそのまま卒業しましたが、中学校では最初から通うようになったのです――。

学校は社会性を身に付けるために大切な場です。いろいろな力を持つ子どもが集うからこそ、一緒に勉強する中で切磋琢磨できます。他の人が頑張る姿を見て、自分も頑張ろうと思い、互いを認め合うことが出来る。だからこそ、どの子どもも安心して楽しく通える存在であるべきなのです。学校を取り巻く環境はさまざまに変化していますが、子どもを軸に考えれば指導がぶれることはありません。校長としてその思いを伝えつつ、教師が自分の思いを発揮できるよう、見守り、また支えていきたいと思います。

特集

授業で高める自己肯定感

最近、自分に自信を持てない子どもが増えているのではないか──。
誰かの役に立ち、認められる経験を通じて高まる
「自己肯定感」は将来にわたって
主体的に学びに向かう基盤であるともいえよう。
今号では、自己肯定感を高める
授業のあり方について考えたい。

総論

子どもに自由を与え、
主体的に学ばせることで
自己肯定感を高める
授業づくりのポイントを
識者と校長が対談

P.4～9

学校事例 ❶～❸

授業づくりや
学級経営の工夫により、子どもの
自己肯定感を高めている
取り組みを紹介

P.10～21

展望

子どもにこれからの社会の変化に
応じた力を付けるために、
自己肯定感を持つ大切さや
指導で心掛けたいことを
識者が提案

P.22～25

自立的に学ぶ過程や成果が認められる経験から自信と主体的な姿勢が育つ

最近、「自分に自信が持てない」「夢や希望を抱きにくい社会になってきた」という声が聞かれるが、子どもを取り巻く環境や子どもの意識にはどのような変化があるのだろうか。そして、子どもの実態を踏まえて自己肯定感を育んでいくためには、授業においてどのような指導が必要なのか。上智大の澤田稔准教授と、同准教授と共に自由度の高い授業のあり方について研究を進める2校の校長に話を聞いた。

◉子どもたちの自己肯定感について

価値観の多様化により自信を持ちにくい社会に

――先生方が普段、子どもたちとかかわる中で、自己肯定感が低下していると思われるでしょうか。

倉島　私が子どもと接している限りでは、以前に比べて自己肯定感が特に低下したとは感じていません。卒業式を控えた時期には、6年生を数人ずつに分けて、給食会を毎日開きましたが、そこで夢は何かと尋ねると、ほとんどの子どもがなりたい職業を挙げられます。6年生なりに自分を肯定的に捉え、将来のイメージを抱けているのだと感じます。

それでも、諸外国と比べた調査などの結果で日本の子どもの自己肯定感が低いのは、自分を強く押し出すことを避ける国民性が影響しているのではないでしょうか。

中川　私も同感です。子どもの自己肯定感は上がったとも下がったとも言えないと思います。確かに、今の子どもは将来なりたい職業を具体的に言いますが、それは、学校が4年生で「2分の1成人式」を行ったり、職場体験をしたり、教師や保護者から「夢を持ちなさい」と言われたりして、将来のことを聞かれる機会が増えたために、「答えなければいけないんだ。とりあえずこれにしておこう」と、答えを用意している印象も受けます。もちろん、キャリア教育などを行うことで、本

上智大総合人間科学部
澤田 稔 准教授
さわだ・みのる◎名古屋大大学院国際開発研究科博士後期課程単位取得後退学。名古屋女子大文学部准教授などを経て、現職。専門はカリキュラム・教育方法論、比較教育学（アメリカにおける学校教育）。

授業で高める自己肯定感

東京都板橋区立大谷口小学校
倉島民雄 校長
くらしま・たみお◎東京都の公立小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校教諭、板橋区立板橋第六小学校校長などを経て、現職。
板橋区立大谷口小学校◎２０１１年度から2年間、板橋区指導力向上特別研究指定校となり、「個に応じた指導法の工夫と学習環境の活用」の研究に取り組む。児童数は３７６人。

気で関心を持つ場合もあるので、将来について考える機会が増えることは否定しませんが、自分の存在をしっかり見つめた先に夢があるという感じではありません。

自己肯定感は、自分の存在価値を認められることが本質だと思います。注意したいのは、自己表現が出来る子どもが必ずしも自己肯定感が高いとは限らないことです。自分をあまり表現しない子どもでも、友だちの話を真剣に聞いたり、文章で考えを述べたりする態度から、自己肯定感が育っていると感じられることは多々あります。

澤田　子どもの自己肯定感が以前と比べて変化したかどうかは、一概には言い切れないかもしれません。明らかなのは、諸外国と同じ指標を用いて調査をすると、日本における若者の自己肯定感が有意に低いことです（**P.6図1**）。

昔と違い、確かに現代社会は、自己肯定感が持ちにくい環境にあると言えるかもしれません。職業や生き方など、生活のあらゆる面で選択肢が増え、自由に選べるようになった一方で、「それでいいよ」と自分の判断を認めてくれる人や、自分の判断を信じる上での拠り所が見付かりにくくなっているからではないでしょうか。自分ではどれを選べばよいのか分からず、他の人も皆、正解が分からないので、教えてくれることが人によってまちまちとなれば、自分の判断や選択に自信が持てないとしても不思議ではありません。しかも、「自分で選んだ結果は自分の責任」と言われる厳しさがあります。ですから、現代人が自己肯定感を持ちにくいというのであれば、それは子どもだけでなく、大人も同じだといえるでしょう。

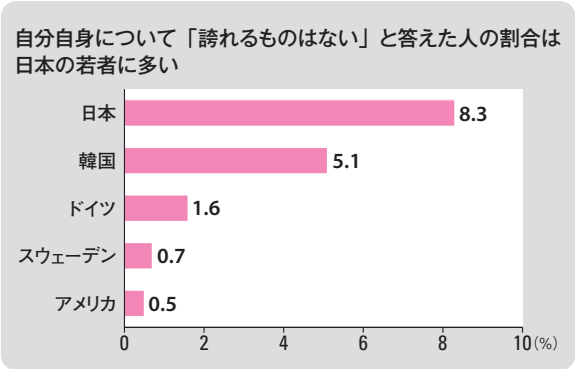
しかし、これらの状況は、他の先進国にも見られると思われます。にもかかわらず、日本の若者の自己肯定感が有意に低いというデータがあるのは、教育や子育ての場において、子どもが自由を与えられた上で、自分で考え、選択・判断し、失敗を通した学びを積み重ねていく試行錯誤の経験が、十分に支援されていないからではないでしょうか。正解を先取りしようとし、「空気」を読んで周りに合わせようとする傾向が高まる高学年になればなるほど、自己肯定感が低くなっているという点は示唆的です（**P.6図2**）。

とはいえ、教育現場で子どもの自己肯定感が課題になることは、それだけ一人ひとりの子どもを尊重すべきという風潮の高まりと捉えることも出来ます。悲観することなく、この社会状況に応え得る教育実践にチャレンジしていきましょう。

東京都板橋区立板橋第一小学校
中川久亨 校長
なかがわ・ひさみち◎東京都の公立小学校教諭、葛飾区教育委員会指導主事、台東区教育委員会指導課統括指導主事などを経て、現職。
板橋区立板橋第一小学校◎板橋区指導力向上特別研究指定校。「一人一人の子どもが生き生きと学ぶ姿が見える授業づくり～学習環境を生かして～」をテーマに研究に取り組む。児童数は３５７人。

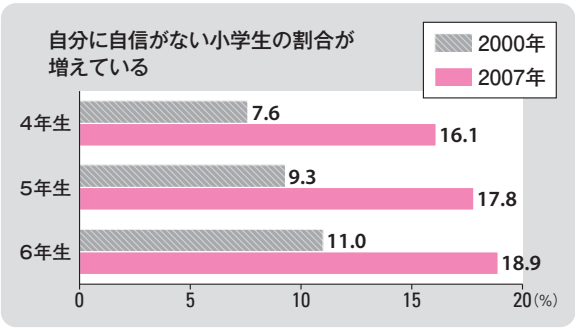
＊プロフィールは2013年3月時点のものです

図1　青年の自尊感情　諸外国との比較



*「あなたは自分自身について誇れるものを持っていますか」という質問に対して、「誇れるものはない」と答えた各国の若者の割合
*内閣府「第7回世界青年意識調査」(2004)を基に作成。調査対象は18～24歳で、日本は1,042人。調査方法は、質問紙を用いた個別面接調査

図2　子どもの自尊感情　経年比較



*「自分に自信がありますか」という質問に対して「あてはまらない」と答えた人の割合
*総務庁「低年齢少年の価値観等に関する調査」(2000)、内閣府「低年齢少年の生活と意識に関する調査」(2007)を基に作成。調査対象は、9～14歳の男女。2000年は1,075人、2007年は1,105人。調査方法は、調査員による個別面接聴取法

◉授業で自己肯定感を育むには❶

自由と責任を与え全面的に承認する

――自己肯定感を育むために授業ではどのような工夫が考えられるでしょうか。

倉島　自己肯定感を育む上では、「自分がやった」という成果を、誰かに認められる状況をつくることが何より大切だと考えます。自分で選んだり決めたりしたことが他者に認められることで、大きな達成感が得られるのです。ところが、日本の学校教育は、一斉授業が中心で、子ども自らがやりたいと思って取り組む学習が少ないのが現状です。「やらされている」と感じる学習が多く、「自分がやった」という実感はなかなか得られません。

中川　日本で行われている一斉指導は素晴らしく、世界に誇れるものですが、授業に子どもが自ら考える場面をもっと増やした方がよいと、私も思います。例えば、本校では、授業の最後にその時間に学んだり考えたりした内容を自分で語れる子どもを育てることを目指しています。その具現化のために、一部の授業で、自分が考えないと学びが進まないという状況をつくり、子どもが主体的に動くことを促すようにしています（**板橋区立板橋第一小学校の事例はP.10からを参照**）。

倉島　本校では、「こう学ばせたい」という教師の論理が子どもの論理に先行して授業を行ってしまうという課題がありました。そこで、教師が複数のコースを準備し、子どもが興味・関心や能力、学習スタイルなどを考えてコースを選択し、自分の力で学習を進める授業を一部で取り入れています。そうした学習では、子どもの実態に合った課題を設定することが大切です。易しすぎても難しすぎても、「自分が頑張ったから出来た」という達成感は得られません。子どもの学びの履歴にも配慮しながら、課題を設定しています。

澤田　2人の話のように、自己肯定感を高めるには、子どもに大幅な自由度が与えられた学習機会を提供することがとても重要です。

日本では、一人ひとりがばらばらなのは良くない、「個」は孤立の「孤」になってしまうのではないかと捉えられています。一方、欧米では、「孤独」は自立のきっかけになるために必要だという考えがあります。1人になることがあるからこそ、集団になった時に豊かさが生み出されるという発想です。

日本でも、個を大事にした授業が、今以上に求められると考えます。私は、全ての授業でなくても、一部の授業で次のようなスタイルを取り入れてみることを提案しています。

単元の導入とまとめ以外は、一斉授業でなく、個々の子どもが用意された教材を用いて自立的に学習に取り組むという進め方です。ルールとして「人に迷惑を掛けない」「教材や道具を粗末に扱わない」「自主的に進める」の3つを設けますが、あとは子どもに任せま

す。ルールさえ守っていれば、たとえさぼっていてもすぐには注意しません。「このままで終わってはいけない」と子どもが自ら気付き、学習に取り組み始めるのを待つのです。

教師の指示に従ったことを褒めるだけでは、その子どもの尊厳につながるような承認には至りません。自分の試行錯誤の経験やそこから得た成果が肯定的に評価されてこそ、「自分は自分のままで、そこそこいい」という自己肯定感が高まるのではないでしょうか。これは、言うことを聞いたら褒めるという「条件付き承認」よりも、子どもがその子どものままで、自分なりに考え、判断して表現することを支援し、その成果を認める「全面的承認」に近いといえます（**図3**）。

図3 「試行錯誤」による「尊厳」と「承認」のメカニズム

著作権の関係で
表示することができません。

子どもに授業を任せては、目標とする学力が付かないのではないかと疑問を持たれるかもしれません。だからこそ、そうならないように、学習材や学習環境を、丁寧に工夫を凝らして作成することを心掛けます。子どもは信じて任されると、それなりの責任を果たそうとして動き出します。それを承認することが、子どもの自信につながると考えます。

こうした個人で進める自立型学習では、協同性が育たないのではないかと言われることもありますが、そこでも、子どもたちの間に「自発的な協同性」が生じ、多様な学び合いが見られます。

中川　確かに、自由度の高い授業をすると、子どもは「自由には責任が伴う」ことを実感を持って経験できます。自由というと楽しいイメージがありますが、自分で決めて自分で動くというのは、受け身でいることよりもずっと大変なものです。任された以上はやらなくてはならないという意識が、自由を与えられることによって生まれているように思います。

◉授業で自己肯定感を育むには❷
子どもに学びを任せる授業で達成感を持たせる

――先生方のお話に出てきた自由度の高い授業は、日本ではあまり見られない授業スタイルですが、成果を具体的に教えてください。

澤田　私が学校に提案する時も、大半の先生方はその手法に懐疑的ですので、まずは「だまされたと思って一度やってみてください」と、とにかく実践してもらうようにしています。すると、いつも受け身で授業を受けている子どもが、自分から動いて学習する様子があちこちで見られ、その姿に教師は驚き、感動します。そして、この授業スタイルに可能性を見いだし、校内に広まっていくことがよくあります。先生方が統制しようとしすぎると子どもは離れようとしますが、逆に自由を与えると、自分で動くための方法を教師に積極的に聞きに来るようになるのです。

倉島　本校では2年間にわたって自由度の高い授業を実践してきましたが、1年程経った頃に子どもになじんできたという印象です。今では、自分に学びが任される授業に、子どもは楽しそうに生き生きと取り組んでいます。子どもがこうした授業を楽しんでいるのは、「自分でやった！」という達成感が得られることが大きいからでしょう。本校ではあくまで一部に自由度の高い授業を取り入れており、他の大半は一斉授業ですが、ここで培われた「自ら学ぶ」姿勢は、一斉授業での学習姿勢にも表れていると感じています。

澤田　同じ課題を同じペースで取り組む授業では、どうしても子どもの間で序列が生まれてしまい、一人ひとりの良さを引き出す上で

あまりよい影響はありません。しかし、子どもが自分で計画して学んでいく授業では、異なる人間関係が築かれることが多々あります。例えば、子どもは個々に異なる課題に取り組むため、進度もまちまちです。普段は進度の遅い子どもでも、既に取り組んだ課題であれば、まだ取り組んでいない誰かに教えることが出来ます。一斉授業では目立たない子どもが活躍できることも、この授業スタイルの良さといえるでしょう。

◉授業で自己肯定感を育むには❸

高学年は自己肯定感が低下 認め合いを重視した授業を

中川　子どもが自由に進める授業では、子どもが自ら計画を立てる必要があります。1、2年生では単元全体を見通すことがまだ難しいので、3年生くらいから取り入れるのがよいのかもしれません。ただ、1、2年生でも、課題やコース設定を工夫することで、自分で選択させたり決めさせたりすることは可能だと思います。

澤田　発達段階という言葉に縛られすぎると、子どもの可能性を狭めてしまう危惧もあると思います。

幼児教育には、自由保育という考え方があります。一斉保育とは対照的に、子どもに自分でどのような遊びをするのか、1人で遊ぶのか、誰かと遊ぶのかということを考えさせるという保育活動です。幼児期に子どもが自分で課題を見付けて解決するという活動が出来ているのですから、低学年でも、自分たちが進める学習をある程度は見通すことが出来るのではないかと思います。

また、子どもが自由に進める授業では、早く進むことよりもよく分かることが大事だということ、そして、私の尊敬する先生の言葉を借りれば「分かったふりをすること、人の学習ぶりをばかにすること、自分の心にズルすることが一番恥ずかしい」というメッセージを、さまざまな場面で、いろいろな方法で子どもたちに送り続け、子ども同士が互いを認め合う環境を整えることが大切です。高学年になると、表面的な褒め言葉を掛けられても、「承認」されたとは思えません。教師は、一人ひとりの学びの姿をよく捉えて、的を射た褒め方が出来るように研鑽を積む必要があるでしょう。

◉保護者との連携

子どもの成長や変化を直接見られる機会を設ける

――自己肯定感を育むためには、家庭との連携が不可欠と思われます。家庭への働き掛けなどで工夫されていることはありますか。

倉島　保護者に、教室で子どもが学ぶ姿を見てもらうようにしています。学級通信など言葉で伝えることも大事ですが、授業参観で子どもが変わっていく姿を実際に見てもらう方が、保護者は子どもの成長を実感できるでしょう。そうすれば、家庭でも子どもを認めるような声掛けが多くなり、自己肯定感の向上につながると思います。

中川　子どもを認めることが、自己肯定感を育むためには何より重要です。そのためにも、担任には1日も早く学級全員の名前を覚えるように言っています。あいさつも「○○さん、おはようございます」と名前を呼んですると、子どもは「先生の頭の中に自分という存在が入っている」とうれしく感じます。

同様に、保護者には子どもを認めることを大切にしてほしいと強調しています。先日、保護者も参加して行った3年生の調理実習で、教師が包丁の使い方を教えているにもかかわらず、子どもがためらっていたら、保護者が包丁を手に取り、切ってしまう姿が見られました。これでは、自分で取り組もうとする力が育たず、何でも他人任せになってしまいます。最初から答えを与えるのではなく、まずは子どもがやろうとしていることを認めることが大切です。安全にかかわること以外は、「失敗してもいいからやらせる」という気持ちを持っていただきたいです。

澤田　保護者もまた自己肯定感を持ちにくいのが現代社会です。ありきたりですが、保護者と教師が「共に」子どもの成長のために出来ることを考えて、実行しようという姿勢を

共有することが大切でしょう。

保護者に自信を持ってもらう上で有効なのが、子どもの育ちを共に確認できる機会を持つことです。例えば、アメリカなどで行われている子ども主導の三者面談はお勧めです。これは、子どもがその学期での自分のベスト・ワークや苦労したこと、次の学期への課題などについて自分で説明し、保護者や教師からの質問やコメントに受け答えしながら進めていくという方法です。面談前には、子ども同士で保護者役、教師役になってリハーサルをします。保護者は、子どもが自分の言葉で、自分の学びの履歴をたどる姿を目の当たりにすると、子どもの成長を実感し、子育てに自信を持てるきっかけになるように思います。

◉学校全体で取り組むために
子どもの変化を教師間で共有することが意識の高まりにつながる

――自己肯定感を育む授業を校内に広めるために、どのようなことがポイントとなるでしょうか。

中川　教師間で子どもの良さを共有し、また指導の苦労を共にすることが大事ではないでしょうか。そうするうちに、共通理解が深まっていき、協働する意識が生まれるでしょう。

倉島　本校では、研究の成果を共有することが、学校全体で取り組みを進める上で欠かせませんでした。具体的に言うと、「子どもが変わった」という実感が、研究を推進する原動力となっています。学校には大勢の教師がいて、皆が同じような意識とは限りませんし、多少の温度差があるものです。私は、意欲のある教師を核として研究を盛り上げていく雰囲気をつくることも大切にしています。

中川　子どもの変化は、教師に大きな影響を与えます。本校でも、子どもの姿をきっかけに授業改善の努力を続けていたら、教師一人ひとりの指導力と同時に、組織力が高まってきました。共通理解を図るスピードがとても速くなったと思います。

――最後に、これから取り組みを進める上でのアドバイスをいただけますか。

澤田　ここでは3つを挙げたいと思います。

1つめは、授業研究で話題の中心を子どもに置くことです。授業研究では、教師の発問や板書の仕方に力点を置くことが多いかと思いますが、そうではなく、子どもの名前を挙げて「○○さんは、あの時にこのような考え方をしていたから、あのようなつぶやきをしたのではないか。そうならば、このような支援も考えられたのではないか」といった、子どもの具体的な姿や声を通した、授業の振り返りを教師全員で行うのです。

2つめは、授業を今以上にもっともっと子どもを主役にしたものにするということです。周到に準備して子どもに任せると、教師側が予想した以上に、子どもが自ら学んでいく姿に驚き、考えを改めることが多く見られます。

3つめは、出来るだけ学校全体のチームワークが育つような授業研究にすることです。互いの個性を生かし合いながら、学校全体を1つのチームとして授業改革の試行錯誤に取り組み、子どもが成長する姿にチームとして手応えを感じられる時、教師自身の自己肯定感も育まれていくと思うからです。

――本日はありがとうございました。

自ら考えなければ進まない学習で達成感を経験させて自信を高める

東京都 板橋区立板橋第一小学校

子どもが自分で学習内容を選び、各々のペースで学習を進める「自由進度学習」を研究している板橋区立板橋第一小学校。当初は教師の間に「本当に学びが成立するのか」という不安もあったが、生き生きと学ぶ子どもの姿を目の当たりにして研究の機運が高まっている。

取り組みのねらい

- 「自分の力で出来た」という体験によって、主体性や自己肯定感を高める

取り組みの内容

- 自分で学習内容を決めさせることで、学習に責任感を持たせる
- 自分のペースで学習を進めさせることで、理解や定着を図る
- 「自分が考えなければ学習が進まない」という状況をつくり、主体的な行動や思考を促す

取り組みの成果

- 子どもが主体的に考えるようになり、発想の広がりも見られるようになった
- 子ども同士のかかわりが増え、自分に自信を持つ子どもが増えた
- 教師の教材研究に対する熱意が高まり、子どもを見る視野が広がった

School Data

◎1874（明治7）年、板橋学校として開校。2011年から3年間、板橋区指導力向上特別研究指定校。研究主題は「一人一人の子どもが生き生きと学ぶ姿が見える授業づくり」。2013年4月、新校舎が竣工。

校長	中川久亨先生
児童数	357人
学級数	12学級
所在地	〒173-0013 東京都板橋区氷川町13-1
TEL	03-3961-0100
URL	http://www.ita.ed.jp/edu/ita1es/
公開研究会	2013年11月22日（金）予定

◉取り組みのねらい

「自分で出来た」という実感を自信や自己肯定感につなげる

「この授業スタイルで、本当に子どもたちが学びに向かうのか、最初は不安でした。ところが、いざ始めてみると、子どもは今までになく生き生きとした表情を見せ、授業を楽しみにするようになったのです。そうした子どもたちの姿を目の当たりにして、研究を深める気持ちが高まりました」と、板橋区立板橋第一小学校の中川久亨（ひさみち）校長は振り返る。

同校は、2011年度から板橋区の研究指定を受け、一斉授業を大切にしながら、一部

授業で高める自己肯定感

の単元で「自由進度学習」を取り入れている。これは、1教科もしくは2教科の単元を同時に扱うこととし、子どもは教師が設定した複数のコースから1つを選び、例えば、授業時間が各教科8時間だとしたら、最後の授業までに2教科両方のコースを終えるように自分で計画を立て、学習を進める授業スタイルだ。最初に行うコース説明と最後のまとめは一斉授業だが、その間の授業は子どもが自分で作成した学習計画に沿って、単元全体を見通しながらゴールを目指す（図1）。

例えば、12年度の5年生では、国語の古文と理科のふり子の学習を2学級合同で同時に進行させた。つまり、同じ時間に同じ教室で、国語を勉強する子どもと理科を勉強する子どもがいることになる。どの時間にどちらの教科を学習するかは子どもに任せており、前半は国語に専念して全てを終わらせてから理科に取り組む子どももいれば、国語と理科を交互に学習する子どももいる。苦手な教科により多くの時間を割くことも出来る。

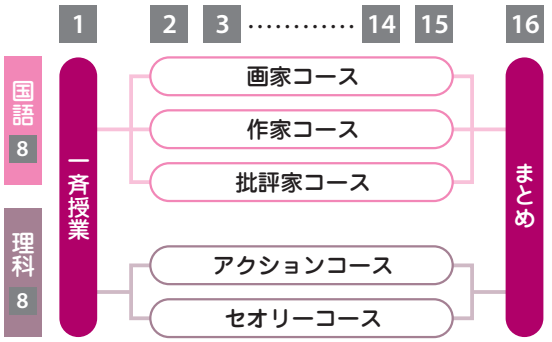
授業中は、教室を出て、好きな場所で学習してもよい。子ども同士が話をして笑い声が上がることもあるが、他の子どもに迷惑を掛けていなければ、教師は注意しない。定着を確認する教師のチェックポイントはあるが、あくまでも子どもの自主性に委ね、「このままでは終わらないから、そろそろやらないと」と気付くまで辛抱強く見守る。

このように自由な状況を子どもに与えることのねらいは、どこにあるのだろうか。研究主任の海野（うんの）初枝先生はこう説明する。

「この授業では、子どもが自ら学習の内容や進め方を決め、教師の力を借りずにゴールにたどり着きます。『自分の力で学習できた』という体験は大きな自信となり、自己肯定感を高めることにもつながります」

この授業は、学校のシンボルであるイチョウの木をキャラクター化した「イッチー」にちなんで、「イッチー学習」と呼んでいる。

図1 自由進度学習の進め方 例：5年生の国語・理科



上記の場合、1時間目に学習内容の説明があり、国語から1コース、理科から1コースを選び、2〜15時間めの授業で両方が終わるように計画を立てる。そして、2〜15時間めは課題に取り組み、16時間めは学習の成果を発表する　＊同校の資料を基に編集部で作成

◉取り組みの内容

自分から考えなければ学習が先に進まない状況をつくる

子どもは、イッチー学習をどのように受け止め、学んでいるのだろうか。

子どもが最初に考え、判断する場面が、コースの選択だ。5年生の古文では、物語を読んで絵巻物をつくる「画家コース」、エッセイを書く「作家コース」、批評的な意見をまとめる「批評家コース」の3つとした（図1）。

「自分で学習内容を選ぶのは、子どもにとって難しいことです。『どれが楽しそうか』『早く終わりそうか』『友だちは何を選ぶか』などさまざまな思いが渦巻きます。そのように思いながらも自分自身で決めることが、『選んだ以上は最後までやり通す』という主体的な学習に結び付きます」（海野先生）

コース選択後は、教師が準備した「学習カード」に沿って学習を進める（P.12図2）。学習カードは1時間ごとにあり、コースによっ

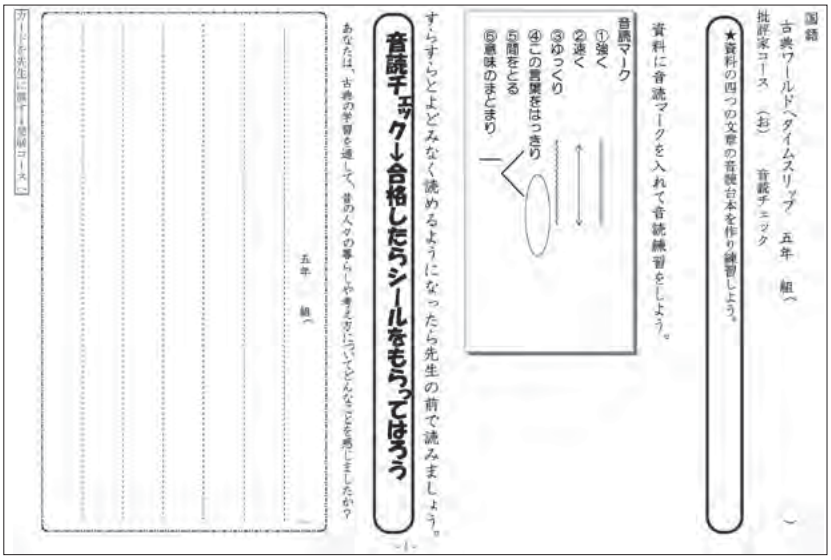
板橋区立板橋第一小学校校長
中川久亨 なかがわ・ひさみち
「子どもが伸びる教育を実現するために、教職員が元気で明るく働ける環境をつくるように心掛けている」

板橋区立板橋第一小学校
海野初枝 うんの・はつえ
研究主任。5学年主任。主幹教諭。「一人ひとりの子どもに居場所があるクラスをつくりたい」

板橋区立板橋第一小学校
宮本彩 みやもと・あや
3学年主任。体育主任。「子どもの心に寄り添い、クラス全員が『学校は楽しい』と思える学級経営を目指す」

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

図2　5年生国語・古文の「学習カード」


国語
古典ワールド〈タイムスリップ　五年　組（　）
批評家コース　（お）　音読チェック
★資料の四つの文章の音読台本を作り練習しよう。
資料に音読マークを入れて音読練習をしよう。
音読マーク
①強く
②速く
③ゆっくり
④この言葉をはっきり
⑤間をとる
⑥意味のまとまり
音読チェック→合格したらシールをもらってはろう
すらすらとよどみなく読めるようになったら先生の前で読みましょう。
あなたは、古典の学習を通して、昔の人々の暮らしや考え方についてどんなことを感じましたか？
五年　組（　）
カードに先生に聞く（読解コース）

「学習カード」は子どもが自分で学習を進められるように工夫している＊同校の資料をイラストを削除して掲載

て内容は異なる。教師は複数の教科書を参考にして必ず理解してほしいポイントを抽出して学習カードを作成する。

「学習カードは学びの道筋となるもので、子どもがどのような思考をするかをイメージしながら作ります。易しすぎると十分に考えないうちに終わってしまい、難しすぎると先に進めない子どもが出てきます。コースごとの学習カードの作成は大変ですが、学習の正否を決めるので最も力を注いでいます」（海野先生）

学習カードで学びの道筋は示されるが、自分で考えなければ学習は先に進まない。それこそがイッチー学習の肝といえる。

ある子どもは、一斉授業では静かに座っているが、教師の話をあまり理解できていないようだった。しかし、イッチー学習では、自分で一つひとつ考えて理解し、進める必要がある。そのため、その子どもは自分から分からないことを何度も教師に聞きに来た。そして、確認のテストで満点を取って大いに自信を付けたという。

クラス内の学習の序列から自由になり学び合いが活性化

主体的に考えることにより、子どもの発想はどんどん広がっていく。例えば、早く学習を終えた子どもに、発展学習として、教師が『源氏物語』の那須与一（なすのよいち）の物語で登場した弓矢を作らないかと提案した。すると、同時に行っていた理科のふり子を弓矢で射る「那須与一ごっこ」が広がった。国語と理科の融合により、学びが深まった例だ。

「イッチー学習では、教師が与えたものを超えて、新しいアイデアが生まれます。自分たちが生み出した学習は、心に深く刻まれる体験となります」（海野先生）

写真　5年生の古文で画家コースを選んだ子どもの作業風景。同じ学習を進める子どもの間に自然と学び合いが生まれている

自分で考える学習に子どもたちは前向きに取り組む。3学年主任の宮本彩先生は次のように話す。

「子どもはイッチー学習を待ち望んでいて、『次のイッチーはいつ？』とよく聞きます。自分で考えたり、友だちと学び合ったりするのが楽しいからでしょう」

学び合いが促されるのも、イッチー学習の特徴だ。学習が進むにつれて、自然と子どもたちが集まり、学び合う姿が見られるという。普段はかかわりが少ない男子と女子が話し合ったり、2学級合同で行う高学年では他クラスの子どもと話し合うことも多い。

イッチー学習は、一人ひとりの計画によっ

て学習進度が異なる。そのため、理科を先に進めていた子どもが、国語を先に進めていた子どもに、既習の学習内容を教えるということも起きる。中川校長はこのように話す。

「理解の早い子どもが必ずしも先に進むわけではありません。そのため、クラスの学習の序列が崩れることが、イッチー学習のよいところです。普段は理解するのに時間が掛かる子どもが、いろいろな子どもに教えるといった逆転現象のような場面も見られます」

◉取り組みの成果

最も変わったのは教師 教材研究や子どもの見方に変化

研究を通して最も変わったのは教師かもしれないと、宮本先生は感じている。

「以前は、『教科書に載っているから教えなければ』という意識が強かったと思います。それが、どのような発問をすれば子どもが自ら動きたくなるのか、言葉を精選するようになりました」

イッチー学習では、教師は事前の教材研究やコースづくりに力を注ぎ、授業中は一人ひとりの姿をじっくりと見て評価する。そのため、子どもの見方が大きく変わったことも変化の1つとして、海野先生は強調する。

「授業中にあまり意見を言わなくても、実はよく考えているなど、子どもの意外な一面を発見することが多くなりました」

授業中に子どもを褒めることも増えた。

「一斉指導では見付けられなかった良さを褒められるようになりました。そうしたことも、子どもの自信につながっています」（宮本先生）

課題の1つは、独力では学習が進められない子どもへの対応だ。現在はヒントを与えるなど個別指導をしているが、どうしても自分で動き出せないことがある。どのような支援をすれば、自分で考え、達成感が抱けるようになるのかを協議している。

2つめは、子どもにどの程度の自由を与えるかだ。今は床で寝ころんで考えることを認めるなど、かなりの自由を与えている。しかし、子どものためにどこまで許すことがいいのか、更なる検討が必要と考えている。

「『何でもあり』の状況では収拾が付かなくなる恐れがあります。あいさつや声の大きさ、持ち物など、守るべきルールを教師間で共有し、子どもに浸透させたいと考えています」（中川校長）

また、自由進度学習は、新しい概念を学ぶことには向かず、調べ学習や体験学習に向いている。自由進度では難しいと感じる時は、一定の時間を一斉授業に戻すなど、取り入れる場面を見極めることも大事だという。

子どもの明らかな変化に、教師は手応えを感じている。更に研究を深め、主体的な学びを促すための手立てを検討していく考えだ。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師をやる気にさせることが、校長の役割の1つです。そのために、タイミングよく、前向きな声掛けをするようにしています。人間は本来、面倒臭がりなものですし、教師は多忙です。それでも「中川校長に言われたら仕方ないな」と、前向きに捉えてもらえる存在でありたいと思います。ただ、上意下達では動く気がなくなりますから、教師との会話を大切にして、同じ目線を持てるような人間関係づくりに努めています。

校長 **中川久亨**先生

ミドルリーダーの役割

先生方と教材づくりの大変さを共有することを大切にしています。若手の先生が研究のイメージをつかめない時には、具体的に伝えるのも私の役割と考えています。

研究は多くの先生がかかわることで、より面白いものになります。例えば、教材づくりをあえて職員室の皆から見える場所で行うことで、「何に使うの？」などと声を掛けてもらえます。そのようにして学校のみんなを巻き込んで研究に取り組んでもらうことを大切にしています。

研究主任 **海野初枝**先生

学びの意味や楽しさを「実感」する授業づくりで自信や意欲を育む

埼玉県 さいたま市立高砂小学校

これまでの研究から概ね基礎的・基本的な学習内容の定着は図られてきたさいたま市立高砂小学校は、2012年度から、「分かった・できた」「使えた」などの達成感を持たせ、子ども自身が学びの良さや有用性に気付き、自己の学びを実感する授業づくりに取り組んでいる。研究の進展に伴い、自信や意欲の向上、また学び合いの深まりといった変化が表れてきた。

取り組みのねらい

- 子どもが学習の成果から達成感や自信を持ち、学んだことを実感しながら現在および未来の自己の生き方につなげていく
- 授業を通して自信を深める場面を増やし、自己肯定感を高める

取り組みの内容

- 子どもを見取る視点を明確にし、子どもが学びを実感している姿の具体化を図る
- 「教師の働きかけの工夫」「学び合う活動の充実」「学びを自覚化させる工夫」という３つの方向性から授業改善を進める
- 授業づくりの基本として９つの重点項目を共有する

取り組みの成果

- 主体的に学習に取り組む姿や学んだことと生活とのつながりを意識する姿が多く見られた
- 共に学び合う活動を通して、互いにかかわり合い、共感しながら、学びを実感する姿が見られた

◉取り組みのねらい

教師の目線ではなく子どもが意義を感じる授業を

さいたま市立高砂小学校は、2012年度に創立142年を迎えた伝統校だ。5世代にわたって通ってきた家庭もあり、地域住民の学校に対する愛着は強い。また、文教都市といわれるさいたま市の中心部に位置することもあり、教育熱心な保護者が多く、全体的に子どもの学力は高いと、小山勝校長は話す。

「生活習慣が定着し、学習に意欲的な子どもが多くいます。その中にも多様な個性を持つ子どもがいるのは、公立小学校の良さです。

School Data

◎1871（明治4年）開校。毎年、全教科で自主的な公開研究協議会に取り組む。2012年度からの研究テーマは、「子どもの学びを基軸にした教育課程の創造～子どもが学びを実感できる授業づくり～」。

校長	小山 勝先生
児童数	822人　　学級数 24学級
所在地	〒330-0064　埼玉県さいたま市浦和区岸町4-1-29
TEL	048-829-2737
URL	http://takasago-e.saitama-city.ed.jp/
公開研究協議会	2014年2月7日（金）予定

授業で高める自己肯定感

一人ひとりの可能性を伸ばすために、本校では以前から自主研究に取り組んできました」

毎年実施する「公開研究協議会」は、12年度に41回を迎えた。校内研修も頻繁に行うため、子どもは授業中でも人から見られることに動じず、「自分の力を見てもらいたい」という気持ちがある。

これまでの研究は、その時々の子どもの実態に応じ、主に学習指導法をテーマとしてきた。その中で近年見えてきた課題が、子どもが学ぶ意義をあまり実感していないのではないかということだった。研究主任の中條真紀先生は次のように説明する。

「確かな学力を身に付け、生き生きと学ぶ子どもを育成していくためには、子どもが自己の成長や変容に気付き、豊かな学びを通して、学ぶことの有用性や自己の変容を実感できる授業づくりが重要だと考えます。そこで12年度から、教師の目線からではなく、子ども自身が『分かった・できた』『使えた』『変わった』といった実感を持てる授業を目指して研究を進めています」

◉取り組みの内容・成果

3つの方向性を共有し授業改善に取り組む

まず、子どもが「学びを実感している姿」の共通理解を図った。これは、教師全員が同じ授業を見て、発問や子どもの反応を書き出し、その中で「学びを実感している」と思った場面にシールを貼るなどして、検討を重ね、授業の見取りの視点とした（図1）。その上で、目指す授業づくりの方向性を、教師、学習材、学習活動から具体化した（図2）。

①教師の働きかけの工夫―疑問や期待を抱く教材など、情意面から子どもに働き掛ける。

②学び合う活動の充実―協同して学ぶ活動を充実し、学習の理解や思考を深める。自分

図1　子どもが学びを実感している姿の見取りの視点

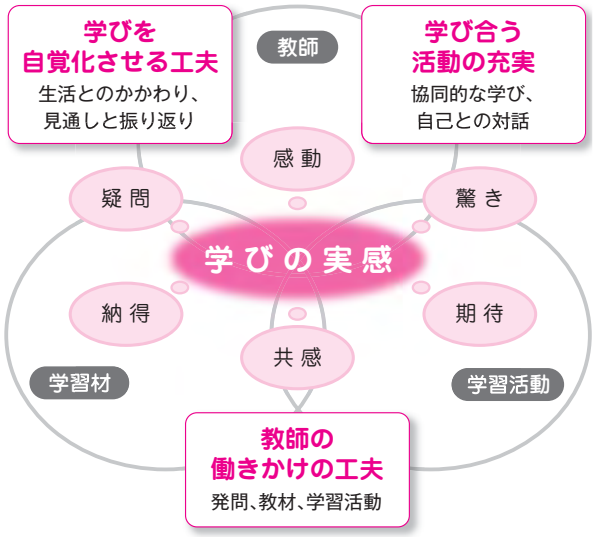
〈分かる・できる〉を自覚している（基礎・基本の習得）
「分からないことが分かった」「出来なかったことが出来た」

〈使える〉を自覚している（知識・技能の活用）
「学んだことを使える」「学んだことが役立った」

〈変わる〉を自覚している（自己の成長・変容）
「よりよい自分へ変わることが出来た」
「出来る自分をもっと感じたい」

＊同校の資料を基に編集部で作成

図2　授業づくりの3つの方向性



＊同校の資料を基に編集部で作成

さいたま市立高砂小学校校長
小山 勝 こやま・まさる
「子どもが夢に向かう力を育むために、学習の理解の徹底、心身のバランスの良い発達を支えたい」

さいたま市立高砂小学校
中條真紀 ちゅうじょう・まさき
研究主任。4学年担任。「子どもは無限の可能性を秘めている。その可能性が開花するきっかけを与えたい」

さいたま市立高砂小学校
小林 隆 こばやし・たかし
生徒指導主任。研究副主任。「子どもも教師も『明日が楽しみな毎日』を過ごせる学校をつくりたい」

さいたま市立高砂小学校
品田大介 しなだ・だいすけ
研究副主任。6学年担任。「子どもと共に学び続けたい。子どもにとって『太陽』のような教師でありたい」

さいたま市立高砂小学校
鈴木友理 すずき・ゆり
5学年担任。国語パート長。「一人ひとりの子どもに目を向け、子どもも私も楽しさを感じる学級をつくりたい」

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

図3　授業づくり「9の重点」

重点1　目標を明確に、子どもの姿は具体的に設定する
目標を明確にして子どもが「分かる」授業をつくる。目指す子どもの姿を具体的に設定すると目標への道筋が見えてくる

重点2　習得する学びと活用する学びを両立させ、子どもの変容を目指す
基礎・基本の定着と共に、習得と活用を両立させる学習の充実を図る

重点3　子どもの思考力・判断力・表現力が育つ授業構成を工夫する
子どもの思考を引き出す、判断をうながす、子どもが表現したくなる仕組みをつくる

重点4　発問、課題を十分に吟味する
学習の方向を決める発問、また活動内容を十分に吟味する

重点5　板書・掲示・空間づくりを工夫する
子どもが学習成果を振り返れる板書や掲示を心掛ける。教室の雰囲気も大切にする

重点6　子どもの反応を想定する
子どものつぶやきや表情の変化、また授業の要所を想定しておく

重点7　教師の言葉掛けを想定する
導入・展開・終末という流れの中で、子どもの学習を深める言葉掛けを想定する

重点8　学び合いを取り入れる
「話し合う・見合う・協力する」など協同して学ぶ学習を取り入れる

重点9　教材・教具を十分に吟味する
十分に吟味した上で、子どもの五感や感性に響く出会わせ方をする

＊同校の資料を基に編集部で作成

や他者の考えを理解し合えるようにする。

③学びを自覚化させる工夫―生活での経験や他教科と関連させながら、課題解決の見通しや学習活動の振り返りを充実させる。

更に、授業づくりの基本として「9の重点」も共有した（**図3**）。

「『9の重点』は本校のスタンダードであり、教師全員がファイルに入れて常に持ち歩いています。若手教師が増える中で、授業の基本を継承する意味もあります」（小山校長）

では、授業実践について見ていこう。

●国語―出来た物語にクラスで賞を贈る

5学年担任で国語パート長の鈴木友理先生は、子どもの自己肯定感の低さを授業中に感じることがあったと話す。

「よい作品が出来上がっても『自分にはこんなものしか出来ない』と言う子どもがいました。それは、本当に出来ていないと思っているのではなく、褒めてほしいことの裏返しでもあるのでしょう。一人ひとりに対しても、出来たことはよく出来たと褒め、出来ないことに手を差し伸べるように心掛けています」

教師からの働き掛けとしては、単元の導入時に見本となる例を提示するようにしている。「どういうものをつくるのか」「どんな姿を目指してスピーチをするか」といったイメージを明確にするのがねらいだ。

授業では学び合いも頻繁に行う。5年生の物語を書く単元では、途中で「編集会議」としてグループ活動を行い、友だちの物語を読んでアドバイスし合った。最後には作品を発表し、良かった点を見付けて賞を贈り合った。子どもは「表現が工夫されているで賞」「話し言葉がいっぱいあったで賞」など、多彩な賞を考えたという。こうした活動によって、作品が価値付けられ、自分の学びの深まりを実感し、自信を深める子どもの姿が見られた。

「話し合い活動を充実させたことで、自分の作品だけではなく、友だちの作品も『もっと良くするには』という観点で話し合えました。普段、特別に仲が良くなくても意見を出し合ったり、自然と拍手を送ったりするようになったのも良い変化です」（鈴木先生）

●社会―歴史を通して、自分の未来を考える

社会では生活とのつながりを実感させるため、教材として身近に感じられるテーマを扱ったり、人物を登場させたりしている。例えば、6年生の外国文化を学ぶ単元では、最初にいろいろな国の食事の写真を見せ、子どもにとって身近な食文化について比較させた。韓国文化を学ぶ授業では、韓国人のゲストティーチャーを招いた。

授業では、「これを調べよう」と教師が指示するのではなく、子どもが調べたくなるような課題の提示を心掛けていると、6学年担

授業で高める自己肯定感

任の品田大介先生は話す。

「最初に子どもが知らないものを見せて興味を引き付け、『調べたい』という意欲を起こさせます。自分からやりたいと思って取り組み、理解できたことが自信につながります」

単に知識を増やすのではなく、社会という教科を通して「自分」や「未来」を考えさせることも大切にしている。

「江戸時代の文化を学ぶ単元では、江戸時代から現代まで伝わる文化がこの先どうなるのかを考えさせました。そこまで長く続く文化を途絶えさせてはいけない、大切にしたいと思うようになり、自分には何が出来るのかと考えが深まります。こうした学習が、これからの自分を考え、自分を認めることにつながると考えています」（品田先生）

●図工―適切な作品例を見せ意欲を高める

図工では、単元の最初に作品をつくる意欲を高めることを大切にしていると、研究副主任の小林隆先生は話す。

「子どもが『自分もこんな作品をつくりたい』と思うようなモデルを見せ、感動の扉を開きます。ただ、あまりレベルが高いと『自分には無理』と思ってしまうので、『少し頑張れば出来そう』というレベルにしています」

小林先生は、子どもの自己肯定感を高めるには授業が楽しいことが最も重要だと話す。

「テーマについてみんなで話し合い、教え合いながら進めて楽しければ、子どもは前向きな気持ちで取り組みます」

制作を通して自分を見つめ直すことが出来るようなテーマも設定している。6年生の最後の単元では、自分の人形をつくった。

「自分に似た人形をつくるためには、自分を見つめ直すことが必要です。その過程を通して、自分を大切にする気持ちを深めてもらいたいと思っています。過去、現在、未来のいずれの自分でもよいことにして幅を持たせています」（小林先生）

◉今後の展望

学び合い活動の工夫により学習に向かうサイクルを確立

今後も授業づくりの3つの方向性を踏まえて授業改善を進めていくが、中でも、学び合い活動には重点を置きたいとしている。

「教師から褒められるのもよいのですが、友だちから認められることはまた格別で、自己肯定感を向上させるには不可欠です。認め合いによって自信が深まると、意欲が湧いて次のステップに進みたくなるというサイクルが生まれます」（小山校長）

単なる話し合いを超え、いかに学び合い認め合える活動にするかが今後の重点テーマだ。

「子どもが学びを実感するために、各教科における学び合いの場面で、どのような働き掛けが効果的なのか、子どもの姿を基に検証していきます」（中條先生）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師集団は、常に目指す子ども像を意識し、一人ひとりの資質や経験を発揮しながら集団として同じベクトルを持たなくてはなりません。私も研究同人の1人であり、集団の後押しをするのは、校長の役割と感じています。また教師だけではなく、職員も一致団結して子どもを育てる学校づくりに努めています。

子どもと同じく、教師も認められるとうれしいものです。互いが認め合える集団にしていきたいと思います。

校長 **小山 勝**先生

ミドルリーダーの役割

「子どもが学びを実感できる授業づくり」という研究テーマと同様に、教師としての学びを実感できる研究にしたいと考えています。研究の見通しを提示すること、その上で組織の力を生かし運営すること、取り組みの成果と課題をしっかり見つめ理論と実践をつなげることを大切に、研究を進めています。近年は若手教師が増えていますが、本校の経営方針「共働共励」を心掛け、共に学び合う仲間として、力を合わせて取り組んでいきます。

研究主任 **中條真紀**先生

子ども主体の学級経営を通して明確な目標意識と自信を育てる

岐阜県 中津川市立西小学校

以前は、自分に自信が持てず、友だちとのかかわりが弱いため、言葉よりも先に手が出てしまう子どもが見られたという中津川市立西小学校。2010年度から、話し合い活動を充実させるなど学級経営のあり方を見直し、友だちと協力しながら、明確な目標を持って主体的に動ける子どもの育成を図っている。

取り組みのねらい

- 自分に自信を持って何事にも頑張れる子どもを育てる
- 友だちの意見を聞いて、自分の考えを表現できるようにする
- 友だちの問題に気付いて、話し合いで解決する姿勢を育む

取り組みの内容

- 学年目標や学級目標を意識させ、行事や日常生活に前向きに取り組ませる
- 話し合い活動を充実させて、自分たちで活動内容を決めさせる

取り組みの成果

- 子どもが自分の成長を実感し、自信を付けた
- 話し合いの大切さを理解し、自然に話し合えるようになった
- 教師の意識が変わり、子どもを前向きにするさまざまな工夫をするようになった

School Data

◎1941（昭和16）年開校。教育目標は、「豊かな心で学び合い、鍛え合う子どもを育てる」。2010年度から2年間、東濃地区教育推進協議会および中津川市教育委員会の研究指定校となる。

校長　林 茂雄先生
児童数 636人　学級数 21学級（うち特別支援学級3）
所在地 〒508-0011　岐阜県中津川市駒場301-1
TEL　0573-66-1355

公開研究会　未定

◉取り組みのねらい

学級経営を見つめ直し子どもの自尊心の向上を図る

自尊感情が低く、自分の考えに基づいて行動する力が弱い――。取り組みを始める前、中津川市立西小学校の教師が感じていた課題だ。教務主任の浅野和久先生は次のように話す。

「本校の子どもたちの自尊心の低さは、校内で実施した調査でも明らかになっていました。自分の考えをしっかり持てないために、友だちとのかかわりの中で、率直に意見を言い合い、考えを深めていく場面があまり見ら

授業で高める自己肯定感

れませんでした」

そのため、以前は乱暴な言葉をぶつけたり、言葉より先に手が出たりする子どもも見られた。それも、自分や友だちを尊重する気持ちが育っていなかったことの表れと、同校では捉えている。

こうした課題を踏まえ、2010年度、東濃地区教育推進協議会および中津川市教育委員会から研究指定を受けたのをきっかけに、子どもの自己肯定感を高め、自分に自信を持ち、何事にも頑張れる子どもを育むことをねらいとし、学校全体で学級経営の研究に着手した。

取り組みの柱は、「『中心となる活動』の工夫」と『話合い活動』の工夫」の2つだ。「中心となる活動」では、学校行事へのかかわりや生活上の諸問題の解決を通し、子どもが発達段階に応じて学年目標を達成することを目指す（**図1**）。

「学校行事は、目標に向けて集団で頑張る力を育てるのに適しています。しかし、行事だけでは、開催時期の間隔が開いて、子どもの気持ちが持続しないので、日常生活でも目標を明確に意識し、頑張れるようにしています」（浅野先生）

図1　発達段階に応じた「中心となる活動」

特別支援　他者を意識する
仲間と協力しながら他者を意識した活動をする

低学年　仲良く助け合う
自分や仲間のよさに気付き、助け合える活動を工夫する

中学年　協力し合う
学年・学級目標を達成する活動を話し合って決め、実行して成果を認め合う

高学年　信頼し支え合う
リーダーシップを発揮する活動や、充実感・連帯感が育つ活動を、学年、全校、地域へと広げていく

学年目標や学級目標を具現化できる活動内容とし、1回の行事だけでなく、繰り返し継続して、活動を徐々に発展させるよう心掛けている　＊同校の資料を基に編集部で作成

◉取り組みの内容

自分たちで決めることで自主的な気持ちが育つ

高学年を中心に、12年度の具体的な活動を見ていこう。5年生の学年目標は、「チャレンジ高学年～したいことよりも、するとよいことが進んでできる仲間～」だった。5学年担任の佐々木宏文先生は次のように説明する。

「仲間を信頼して認め合うと共に、高学年としてふさわしいリーダーシップを身に付けることをねらいとして活動を進めています」

行事を中心とした「イベントチャレンジ」では、「米作り」「キャンプ」「ペア活動（3年生との縦割り活動）」「掲示」「6年生（6年生を送る会の企画・運営など）」「社会見学」の6つのプロジェクトを設定。5年生全員が3学級混合でいずれかのプロジェクトに属し、そのプロジェクトに属した全員がリーダーとして活動を引っ張っていく。

「とにかく全員がリーダーを経験することがポイントです。皆をまとめる大変さなどを経験すると、自分がリーダーではないプロジェクトにも率先して協力しようという気持ちが生まれます」（佐々木先生）

中津川市立西小学校校長
林 茂雄 はやし・しげお
「恕（思いやり）の心を忘れずに、子どもや教職員、保護者、（地域住民）、関係機関の方々に接する」

中津川市立西小学校教頭
田野武彦 たの・たけひこ
「楽しい授業や学校づくりを心掛ける。子どもを全面的に否定も肯定もしないように接する」

中津川市立西小学校
浅野和久 あさの・かずひさ
教務主任。「思いやりがあり相手の気持ちが分かる、そして徹底的に頑張って壁を乗り越えられる子どもを育てたい」

中津川市立西小学校
町野代央子 まちの・ようこ
研究主任。6学年担任。「『こんなことを教えてもらった』などと、子どもの記憶に残る教師になりたい」

中津川市立西小学校
佐々木宏文 ささき・ひろふみ
研究副主任。5学年担任。「熱い気持ちを抱き、何事にも手を抜かずに取り組める子どもを育てたい」

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

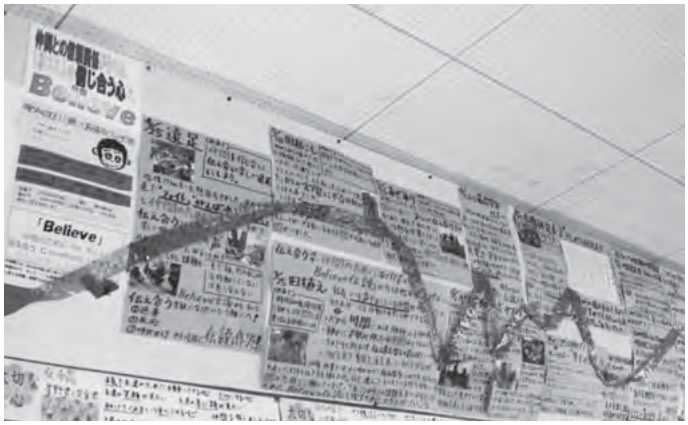


写真　行事や生活にかかわる活動について時系列（左から右）に掲示し、どれだけ目標に近付けたかをビニールテープの矢印の高さで示している。矢印の位置は教師と子どもが相談して決める。具体的な成果が見えやすく、子どもが自信を深めやすい

この活動を通し、子どもにリーダーとしての責任感が育っていくのが手に取るように分かると、佐々木先生は言う。

「普段はおとなしい子がキャンプのリーダーになったのですが、『自分が率先して大きな声を出さなければ、誰も動かない』と気付いて頑張っていました。また、活動を盛り上げようと、休み時間に自発的に動く子ども も少なくありません」

また、子どもの気持ちを前向きにする工夫も取り入れている。例えば、教室の後ろの壁に、目標に対する子どもの気持ちや成果を示す矢印を掲示している（**写真**）。子どもの頑張りに合わせて、矢印が上下するので、自分たちの頑張りを振り返るきっかけになっているという。

6年生の学年目標は、「真・信・伸（しん・しん・しん）」。「学校の顔」として、行事や学校生活において全校児童の見本になるような姿勢や態度を育てている。

例えば、清掃活動では、一人ひとりが毎週、「自分の仕事が終わったら『見付け掃除』をする」「隅のほこりまで取る」など、具体的な「めあて」を決め、毎日、チェックシートに達成の度合いを3段階で評価する（**図2**）。研究主任で6学年担任の町野代央子（ようこ）先生は、次のように説明する。

図2　「にしこう活動」しっかり掃除チェック表

『にしこう活動』しっかり掃除 チェック表

組 G 掃除場所

掃除(生活)リーダー【　　】

◎実行委員で『しっかり掃除』をするために大切なことを3つ決めました。
それぞれを達成するためにはどうしたら良いかめあてを決めて取り組みましょう。

①すみずみまで　②時間いっぱい　③私語なく

掃除(生活)リーダーが
○△×でチェック

名前	分担	めあて	月	火	水	木	金
		①					
		②					
		③					

「『にしこう活動』しっかり掃除チェック表」には、自分でめあてを決めて書き込み、毎日、自分でチェックする。グループごとに1枚に書き込むことで、友だちの目標や達成状況も分かり、刺激となっている　＊同校の資料をそのまま掲載

「めあてを決めてチェックすることで、目的意識が明確になって真剣に取り組むようになりました。きれいになった状態を見たり、教師や他の子どもから褒められたりすると、『頑張った』という達成感が得られて自信につながります」

こうした「中心となる活動」をより充実させるための土台となるのが、校内研究のもう1つの柱である「話合い活動」だ。例えば、6年生では、清掃活動への取り組み方を事前に学級会で話し合う。教師が「こうしなさい」と言うのではなく、自分たちで決めることによって、一人ひとりが「自分のこと」として取り組むようになる。

「話し合いでは、課題を解決するというより、よいところを更に伸ばせるように促しています。清掃に関する話し合いなら、最初に『○○さんがしっかりと拭いていた』『○○くんが時間通りに終えていた』とそれぞれよいところを出し合います。すると、子どもたちの自己肯定感が高まり、『もっとよくするためには』という話し合いがスムーズに進みます。よいところが伸びると、自然と課題も解決されるものです」（浅野先生）

子どもを肯定する言葉が見付からないのは教師の力不足

こうした活動以外にも、日頃から子どもを

授業で高める自己肯定感

認め、自己肯定感を伸ばすことを心掛けている。町野先生は、子どもは授業中の発表がうまくいくと自信を持ちやすいことを実感した。そこで、まずノートに書いてから発表させたり、「明日、これを質問するから考えてきて」と事前に考えさせたりして、発表がうまくできるようにしている。林茂雄校長は次のように話す。

「子どもは『認めて、褒めて、励ます』ことによって前向きな気持ちになります。始めから厳しいことを言われたら、意欲を失ってしまうのは当然です。肯定する言葉が見付からないのは教師の準備不足だと、私は考えています」

集会や給食時の放送などでは、校長や教頭が子どもに言葉を掛けるようにしていると、田野武彦教頭は言う。

「子どもが良いことをしたり、地域の方から褒められたりしたことは、積極的に取り上げて全校に広げています。教育の基盤は愛情です。愛情を込めた言葉によって『自分が認められた』という思いが積み重なり、子どもは成長していくのだと思います」

◉取り組みの成果

子どもが自身の成長を実感し授業を受ける姿勢も変化

子どもが自分の成長を実感し、「自分も出来る」といった自信を深めるにしたがって、さまざまな変化が表れている。

「私が赴任した6年前は、集会では子どもたちが騒がしく、人の話を聞く姿勢に課題がありましたが、今は集中して聞いています。また、相手の話をしっかりと聞いて会話するようになりました」（浅野先生）

子ども同士が衝突した時、力による問題解決ではなく、まずは話し合うという雰囲気も生まれている。話し合いの大切さを理解して、教師に「話し合いの時間をください」と言ってくる子どももいるという。

こうした変化は、授業を受ける姿勢にも好影響をもたらしている。

「相手が自分を受け止めてくれるという安心感が芽生え、自分たちの思いを出し合って自然に話し合えるようになりました。以前に比べ、挙手する子どももかなり増えました」（町野先生）

教師の意識も大きく変化した。

「一連の取り組みを通して、子どもは自分たちが話し合って決めたことには納得して自主的に動くことを実感しました。『子どもの見方が大きく変わった』と話すベテラン教師もいます」（林校長）

今後の課題は、自己肯定感と学ぶ意欲との関係をより明らかにしていくことだという。同校は、今後も授業や日々の学校生活を通した指導の工夫に取り組み、子どもの成長を促していきたい考えだ。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師に対し、ビジョンや方針を明確に示すことが校長の役割と考えています。分かりやすく伝えるために、どのような子どもを育てたいかなど、具体的に語り掛けるように努めています。研究を推進する上では、教師の頑張りを認め、励ますことが欠かせません。そこで「地域からこのようなうれしい言葉をいただいた」などと実践の価値付けをした上で、「もっとこうしていこう」と次なる方向性を指し示すようにしています。

校長 **林 茂雄**先生

ミドルリーダーの役割

良い実践や子どもの姿を校内に広めていくことを大切にしています。また、授業の進め方や研究について研究主任とよく話し合い、学校全体で取り組みを推進したいと考えています

若い先生方を育てる上では、良い点を認めた上で、「こうしたらもっと良くなる」とアドバイスしています。話しやすい関係を築くために、日頃から一緒に食事をするなどコミュニケーションを取ることも心掛けています。

教務主任 **浅野和久**先生

存在の平等と持ち味や能力の違いを認め一人ひとりが際立つ授業を

文教大大学院教育学研究科長　嶋野道弘

これからの社会を生きる子どもたちに、小学校はどのような指導や支援によって、自己肯定感を高めていくとよいのだろうか。社会の変化を踏まえ、今後、学校として、教師として心掛けたいポイントを、文教大大学院の嶋野道弘教授に整理してもらった。

◉現状と将来の展望

前向きな気持ちは「かかわり」の中から生まれる

今も昔も、そしてこれからも、子どもだからこそ持ち得る夢や希望、前向きな気持ちがあり、それは純粋で無邪気で、子ども特有のものです。今の子どもが、それらを持てなくなったということはないでしょう。ただ、持ちにくくなったようには思います。

背景には社会の変化があります。今の日本では、昔に比べれば物質的に恵まれ、情報もすぐに手に入るようになり、生活のあらゆることが便利になりました。「便利」は言い換えると「省略」になります。例えば、以前は電車に乗るためには、行き先までの料金を調べ、切符を買い、駅員に見せる必要がありましたが、今はカードを機械にかざすだけで乗車できます。いくつもの手続きを省略することによって便利になっているわけです。

社会がどんどん便利になっていく中で、人やモノとかかわり、体験をする機会がいっそう少なくなると予想されます。かかわりが減れば、感じ、考え、判断し、感謝したりすることが少なくなります。そうした状況は、子どもの思考力や感性、また夢や希望を育む上では、マイナスに働いているのです。

例えば、生活科の授業で、自分でまいた種が発芽すると、「ぼくがまいたから芽が出た」と子どもが言います。これは、自分がかかわったことで対象に変化が起こり、それによって思考や感情が動いているのです。

また、花屋を訪れた時、お店の人から「小さい頃から花が好きで花屋になりたいと思っていた」という話を聞いた子どもが、「夢を持つのはいいことだなあ。僕も夢を持ちたい」と言っていました。夢や希望は、人やモノとかかわって「すてきだな」などと感じることから生まれます。

子どもが夢や希望を持ち、自己を確立できるように、人やモノとかかわり合う体験の大切さを今一度、見つめ直す必要があるように思います。そして、そうした機会を学校教育の中に意図的に設けていくべきだと思います。

教育には、不易と流行があります。子ども

授業で高める自己肯定感

の自己肯定感を高めることは、いわば不易です。一方、社会の変化（流行）に伴い、教育内容や質を変えていくことも求められるのです。

これからの社会では、グローバル化が進み、価値観がますます多様になります。その中で、自分を見失わないためには、自分をしっかり持ち、自分の存在を尊いと思うことが出来る自己肯定感がますます大切になるでしょう。

◉授業で高める自己肯定感

持ち味に合った役割を持たせることで自己肯定感を高める

では、子どもの自己肯定感を高めるにはどうすればよいのでしょう。まず、授業のあり方を検討してみる必要があると思います。一斉授業は基本となりますが、一方で「一人ひとりが際立つ授業」をもっと心掛けていくべきだと思うのです。これは、子ども一人ひとりが存在感を発揮しながら、クラスみんなとかかわる授業のことです。

そうした授業を実現させるためには、存在の平等と、持ち味や能力の不平等を認めることが大切です。まず、一人ひとりの子どもがクラスの一員であり、そこに存在することにおいては平等でなければなりません。一方、持ち味や能力には歴然とした違いが出ます。そうした違いをしっかり認めましょう。持ち味や能力の不平等を認めることは、個を尊重して、存在の平等をはっきりさせることにつながります。近年、個の尊重に関しては、全国で良い例が増えていると思います。子どもをよく捉え、子どもを理解し、適切な指導をするという「共感の教育」の広がりが見られます。

「共感の教育」で大切にしたい3つのポイントがあります（**図1**）。1つめは子どもに「そうそう」と共感すること、2つめは「なるほど」と納得すること、そして、3つめは子どもに「おやおや」「あれあれ」と驚くことです。こうした言葉がたくさん飛び交う授業は、とてもよい雰囲気です。子どもは、自分の考えに相手が共感したり、納得したり、驚いたりすることや自分がそうさせたことをうれしく感じ、自信を持ちます。

また、特別活動や係活動も、自己肯定感を高める上で重要な役割を果たします。こうした活動を通して子どもに持たせたい感情とし

しまの・みちひろ◎埼玉県公立小学校教諭、文部科学省初等中等教育局主任視学官などを経て、現職。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間専門部会委員。著書に『子どもの心を動かす親と教師の"語りかけ"』（明治図書出版）など。

図1　共感の教育の3つのポイント

1. 「そうそう」＝共感
2. 「なるほど」＝納得
3. 「おやおや、あれあれ」＝驚き

この3つの言葉が飛び交う授業では、子どもが前向きに学んで自信を深める

＊嶋野教授の資料を基に編集部で作成

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

て、私は、自分は役に立っているという「自己効力感」を挙げたいと思います。

子どもが自己効力感を持つ状況は2つあります。1つは結果に期待しているときです。「うまくいきそうだ」「（競技などに）勝てそうだ」といった結果への期待を持つと、子どもはがぜん意欲的になります。

もう1つは、結果はともかくとして、「自分は関与できそうだ」「自分は役に立てそうだ」といった関与と効力への期待を持つと、やはり意欲が高まります。例えば、体育の時間で、けがをして試合に出られない子どもが、記録係を任されたとしましょう。チームのために一生懸命に記録して、友だちから「しっかりと記録してくれたから、よい作戦を立てられた。ありがとう」と言われれば、自己効力感は高まります。そのように、個々に合った役割を与えてやりがいを持たせることは、存在の平等と持ち味や能力の不平等を認めて、一人ひとりを際立たせることに他なりません。

◉子どもとのかかわりで心掛けたいこと

「優しい先生」を超え「ありがたい先生」を目指す

自己肯定感を高める観点から、教師は子どもにどのようにかかわればよいのかを考えてみましょう。

新課程では、体験活動や言語活動が重視されています。直接体験したことを言葉で表現するのは、子どもの自己肯定感を高めるためにはとても有効です。特に、言葉に置き換えることによって体験の意義が大きくなることがよくあります。

ある小学校でのことです。体育の授業でボールゲームに負け続けているチームがありました。そのチームが頑張って練習し、初めて勝った時に、子どもから「今日は記念日だ」という言葉が出てきました。私がその場面で感じたのは、「勝った記念日」であると同時に、「これからも勝てるという可能性を見付けた記念日」「自分たちに自信を付けた記念日」でもあることです。それを子どもたちに伝えれば、より自信を付け、自分たちの可能性の大きさを意識するようになるでしょう。

教師は、子どもの言葉や行動や表情を拾い、意味付けたり価値付けたりすることが大切です。もちろん全部を拾えるわけではありませんが、出来るだけ逃さないように心掛けたいものです。例えば、子どもの発言だけではなく、それを聞いている子どもの姿やつぶやきにも注意して、「どうして『なるほど』と言ったの？」と聞けば、クラス全体に思考の輪が広がっていくでしょう。そのような授業を続けていくうちに、「学びを実感し合う学級」が出来るはずです。

こうしたかかわり方は、「優しい先生」を超えて、「ありがたい先生」になることにもつながります（**図2**）。ありがたい先生は、優しい上にきちんと子どもを育てます。例えば、優しい先生は、「いいね」「すごいね」「がんばって」と褒めたり励ましたりします。一方、ありがたい先生は、「何がいいのか」「何がすごいのか」「何をがんばればいいのか」をきちんと伝えます。また、優しい先生は「これはこうですよ」と丁寧に教えますが、ありがたい先生は「それならこうしたら」と子どもの気持ちをくんで教えます。そうした指導により、子どもは自分を肯定的に捉えて、自信や意欲を付けていくのです。

図2　「優しい先生」と「ありがたい先生」

優しい先生	ありがたい先生
「いいね」 「すごいね」 「がんばって」	「○○がいいね」 「○○がすごいね」 「○○をがんばって」
褒めてくれる 励ましてくれる	具体的に褒めてくれる 具体的に励ましてくれる
花丸 コメント	アンダーラインと花丸 気持ちをくんだコメント

＊嶋野教授の資料を基に編集部で作成

◉若手教師を育てるポイント

「なぜ」と問う気持ちを持たせ教師の能力を「発揮」させる

私が大学で教師を目指す学生を指導して感

じるのは、多くの学生が真面目で目的意識を明確に持っていますが、生活の中での体験やかかわりが少ないことです。前述の子どもの現状と共通しており、そのまま教師となった時に、生活知や体験知が低かったり、自己発見や自己認識が弱かったりするといった課題が出てくるように感じています。

また、社会には「ハウツー（How to）」の情報があふれ、「なぜ（Why）」と考えない傾向が見られます。教育の場面でも、ハウツー情報はすぐに使えますし、一定の指導レベルに達するという良さはありますが、Whyという気持ちを持たなければ、一人ひとりの子どもを深く理解することは出来ないでしょう。

そこで、若手教師に接する時には、「なぜ」「どうして」と質問したり質問させたりするとよいと思います。例えば、「なぜ、そこに絵を掲示したのか」と尋ねれば、漫然と掲示していた自分に気付くきっかけになるはずです。ノートに花丸を付けていたら、「どうして花丸なのか」と聞いてみてください。また、「あの先生は、良い部分にアンダーラインを引いて花丸を付けている」などと教え、子どもの受け止め方や子どもへの返し方の違いを考えてもらうのもよいでしょう。教師の中にWhyの気持ちが芽生えれば、自然とベテラン教師の指導の深さに気付いたり、自ら勉強したりするようになるでしょう。

私は、よく使われる指導力の「向上」という言葉は、「自分たちに力がないから伸ばさなくてはならない」と重荷に感じられるように思います。それを「発揮」という言葉に置き換えて、若手の先生にも「指導力を発揮してください」と声を掛ければ、「自分の得意分野や持ち味を表に出せばいい」といった前向きな捉え方が出来ると思います。

◉家庭や地域との連携
家庭や地域とのかかわりが子どもの体験を豊かにする

子どもの自己肯定感は、学校だけでなく家庭や地域と共に高めていくものです。

家庭で大事にしたいのが、声掛けです。親子間では言葉がなくても分かり合えることが多分にありますが、言葉を使った方がコミュニケーションが深まります。ちょっとした手伝いでも、「ありがとう」「助かるよ」と感謝の気持ちを表現されれば、子どもは「自分は役に立っている」という実感を得られます。

地域社会でも同じです。近所に住んでいる人が子どもに「学校、がんばってね」と声を掛けてくれたら、それは子どもにとって「かかわり」となります。子どもが潜在的に人とのかかわりを求めていることを忘れないでいただきたいと思います。

日本は、基本的に学校中心の文化だと思います。特に、小学校は地域社会と深くつながっています。今後は、コミュニティースクールに取り組むなど、地域に向けて更に開いた学校づくりを進めていくのもよいのではないでしょうか。地域の人々に協力を求めると、こちらが驚くほど熱心にかかわってくださることがよくありますし、地域社会におけるボランティア活動も、子どもが自分の存在意義を感じられる点で大きな意義があります。

校長先生をはじめとした管理職の先生方は、一人ひとりの教師の持ち味や能力を「発揮」させることを心掛け、学校全体で子どもが意欲的にかかわる授業づくりを進めていただければと思います。

特集取材を終えて

自分に自信がない子どもが増えた、夢を持ちにくい社会になっている……そうした言葉を受けて、今回の特集では「自己肯定感」を取り上げたいと思いました。自分を大切に思う気持ちがあってこそ、人の役に立ちたい、そのために学びたいという意欲につながると考えたからです。取材を通して、よい意味で裏切られたのは、子どもに自信を持ってほしいと実践に当たられる先生から「最近の子どもは自己肯定感が低くなった」という言葉が全く聞かれなかったことです。共通していたのは、子どもが本来持ち備えている感情（自己肯定感）を、授業で、友だちや先生とのかかわりの中でどう高めるか、発揮させるかという前向きな言葉でした。子どもの持つ力を信じて任せ、認め合う授業や学級づくりの参考にしていただけたら幸いです。

VIEW21編集部　杉田美穂

多文化が共生する教室で進める国際理解教育

東京都港区立東町小学校

次代を見据えた時に、
どのような教育活動が求められるのか。
先進的な活動を行う
事例を通して考える新コーナー。
今号は、外国籍の子どもも安心して
学べる環境を整え、
多文化共生の学校づくりを進める学校事例から、
これからのグローバル教育を考える。

オーストラリア、ブラジル、カナダ、中国、エジプト、イラク、イスラエル、フィリピン、ポーランド、ルーマニア、韓国、イギリス、ロシア、シリア、アメリカ、日本――東京都港区立東町小学校には、16カ国の子どもが通い、一緒に学ぶ。

1年生の体育の授業を見ると、体育館で跳び箱の練習中だった（**写真1**）。40人の子どもたちは自分のレベルに合わせて3つの列に分かれ、順番に跳び箱を跳んでいく。指導は、担任と国際学級講師によるチーム・ティーチングだ。国際学級講師は、外国籍の子どもに「Good job!」「Once more.」など声を掛け、時々英語で説明をしている。子どもからも「もっと前に手をついた方がいいよ」「遠くから助走しなよ」と日本語でアドバイスが飛び、外国籍の子どもがうなずく場面も見られた。

School Data

東京都港区立東町小学校

◎1913（大正2）年開校。月2回、「日本文化」として茶道、香道、和太鼓、百人一首、将棋など、日本文化を学ぶ時間を設ける。PTAだよりもPTAが作成する英語版がある。

校長 篠崎厚子／**児童数** 123人／**学級数** 8学級（うち特別支援学級2）／**所在地** 〒106-0047 東京都港区南麻布1-8-11／**TEL** 03-3451-7726／**URL** http://www1.r4.rosenet.jp/higashi-es/

外国籍の子も安心して学べる環境を

外資系企業や大使館が多く所在し、外国人が多く住む港区では、国籍を問わず、子どもが共に学び、共に高め合う機会の充実を目的とし、1年間の準備期間を経て、2012年度に東町小学校の全学級を「国際学級」とした。全学級に外国籍の子どもを受け入れるため、担任以外に、各学級に英語能力のある国際学級講師を配置。2人で学級運営に当たれるようにした。12年度は1学年1学級で、海外居住経験のある日本人4人、外国人2人（オーストラリア、カナダ）が1学級ずつ受け持った。

国語科、社会科、算数科、理科以外の教科は、学級全員で同じ授業を受ける。外国籍の子どもは、国際学級講師に担任の説明や指示を通訳してもらう。国語科、社会科、算数科、理科は原則、外国籍の子どもは別室での授業となる（**写真2**）。国語は、日本人の国際学級講師から日本語を学ぶ時間と、外国人の国際学級講師から英語を学ぶ時間とし、帰国後のための英語力をキープしつつ、日本語の基礎を学べるカリキュラムを作成した。また、算数は、国際学級講師が教科書の英訳本を使いながら指導する。計算や図形などは、英語で学んだ方が帰国後の学習がスムーズとなるからだ。

また、外国籍の保護者が子どもを安心し

港区立東町小学校校長
篠崎厚子
しのざき・あつこ　「大人も子どもも迷ったら一歩進み、とにかく挑戦。努力すること」

港区立東町小学校
荒井綾菜
あらい・あやな　3学年担任。国際科。「国籍にかかわらず、一人ひとりの良さが生きるように指導したい」

港区立東町小学校
古川美代子
ふるかわ・みよこ　国際学級講師。4学年担当。「子どもや保護者に自分から心を開く。偏見を持たない。そうすれば国籍に関係なく、子どもは心を開いてくれる」

て通わせられる環境も整えた。学校だより、学年だより、給食の献立といった学校からの配布物は、全て英語版を国際学級講師が作成。英語での問い合わせには国際学級講師が対応するため、相談もしやすい。

篠崎厚子校長は、次のように話す。

「本校の教育活動への関心は、外国籍児童の保護者だけでなく、日本の保護者にも高まり、13年度の入学希望者が増えています。ただ、本校は、インターナショナルスクールではなく、日本の公立小学校ですから、日本の学習指導要領に沿って教育を行っています」

仲良くしたい気持ちが心の壁をなくす

子どもは、朝の会から帰りの会まで同じ教室で一緒に学び、遊ぶ。こうした日常的な異文化との触れ合いは、子どもの好奇心と意欲を大きく膨らませている。3学年担任の荒井綾菜先生は、「前年度の2年生の時にフィリピン人の転入生が来てから、子どもたちから世界の言葉を知りたいと声が上がりました。日直が朝の会で身近な言葉を外国語で調べてきて発表しています。英語だけでなく、中国語やドイツ語などもあり、関心の広がりを感じています」と話す。

中高学年では読み書きへの関心が高まっていったことから、港区が設定した「国際科」（全学年が週2時間行う英語活動）以外に、金曜の朝学習を「フォニックス（＊）」の時間とした。また、児童英検では、1・2年生全員がブロンズの正解率が8割を超え、中高学年の大半がシルバーの正解率が8割を超えた。「日常的に英語を耳にすることで、聴く力は特に優れているようです」と荒井先生は言う。

こうした英語への関心以上に、教師が驚くのは子どもたちの行動だ。体育での着替えが分からずに困っていた外国籍の子に周りの子が身振り手振りで教える姿や、休み時間に外国籍の子を校庭に連れ出して遊ぶ姿が見られるという。国際学級講師の古川美代子先生は「入学後、しばらくしてから外国籍の子どもに『Did you make good friends here?』と聞くと、挙がる名前はほぼ日本人です。言葉が通じなくても気が合い、友だちとなるのは素晴らしいと思います」と話す。更に、篠崎校長はこう語る。

「文化の違いも国籍の違いも、子どもは何の違和感も持っていません。違いを感じて、壁を作るのはむしろ大人なのではないかと、はっとさせられます。本校の子どもは転入生が来ると大喜びし、友だちが増えてうれしい、親切にしようとする姿は以前から見られました。そうした気持ちがあるからこそ、国籍が違っても、一緒に学び、遊ぶのだと感じます」

国際学級は区の政策であり、どの学校でも出来ることではないかもしれない。ただ、誰もが安心して学べる学校であり続けることが、国籍に関係なく個を発揮させ、互いを認め、学び合う姿勢を育むことにつながることを、同校の取り組みが示している。

写真1　1年生の体育の授業。終盤、跳び箱のテストが行われ、跳べなかった子には、周りの子どもたちから口々にアドバイスや声援が飛んでいた

写真2　国語科の時間に、1年生の外国籍の子ども7人が、別室で外国人の国際学級講師から英語の授業を受けている様子

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

＊英語の綴りと発音との間の規則性を示して、正しく読むための学習

つながる

学校と家庭の学び

「8の字学習サイクル」活動で自主的な学習習慣を育てる

香川県高松市立川東小学校

高松市立川東小学校では、学校と家庭が力を合わせ、自ら学びに向かう子どもを育てる「8の字学習サイクル」活動に取り組んでいる。授業改善によって子どもの学習意欲を伸ばし、家庭で保護者からの声掛けを継続してもらうことで、自主的な学習習慣を身に付ける子どもが増えているという。

子どもの発達段階に応じた自主学習のあり方を工夫する

高松市立川東小学校には素直で真面目な子どもが多く、授業中は私語をせず教師の話に耳を傾け、宿題も期限を守って提出する。このように、教師から与えられた課題には熱心に取り組む半面、計画を立てて学習したり、苦手な教科に取り組んだりという自主性には課題が見られた。

そこで、2010年度から、「8の字学習サイクル」活動を全学年で行っている（**図1**）。これは、学校と家庭が両輪となり、授業と家庭学習の両面から、子どもの自主的な学習習慣を育成するための取り組みだ。柾木（まさき）俊幸校長は、次のように話す。

「学校と家庭が密接に連携することで、学力面と意欲面の2つの効果が期待できると思いました。学力面では、学校で学んだことを家庭でも繰り返し学習することで、学習内容の定着が図れます。意欲面では、学校と家庭で学習したことが、教師と保護者それぞれに認められ、褒められることで、子どもの意欲が高まると考えたのです」

授業では、教師の発問を精選し、子ども同士の学び合いや調べ学習を全学年で増やした。そのねらいを、亀井健男教頭は次のように話す。

「ただ教師に教えられるだけでなく、自分で考える楽しさを知れば、子どもは『もっと学びたい』と感じるようになるはずです。家庭学習への意欲にもつながるように、まずは授業を充実させたいと考えました」

家庭学習では、子どもが自然に学習に向かえるように、発達段階に応じて学習課題の出し方と保護者のかかわり方を次のように工夫した。

低学年：宿題を中心に与える。保護者にはやったことを確認してもらう。

中学年：学習の例を与えながら自主学習に取り組ませる。保護者には見守ることも意識し始めてもらう。

高学年：自ら課題を決め、見通しを立てて自主勉強をさせる。保護者には手は離しても目は離さないようにしてもらう。

保護者には、毎月の学年だよりで協力を呼び掛けた。また、授業参観後に管理職や担任が「8の字学習サイクル」活動を行う理由を伝え、担任を交えた保護者同士で家庭学習に

ついて話し合う時間も設けた。

「学校ぐるみで自主的な学習習慣定着に取り組んでいることを、保護者にしっかりと伝え、理解してもらいたいと思いました」（亀井教頭）

学校がエンジンとなり家庭との連携を推進する

具体的な家庭学習のヒントとなる「家庭学習の手引き」にも工夫を凝らした。それまで2種類作っていた保護者用と子ども用を合体して、A4判用紙1枚に簡略化。ぱっと見て内容がわかるように、学年×10＋10分の学習時間、「テレビは消して」「まず宿題!!」「最後までていねいに!!」という家庭学習に取り組む姿勢への呼び掛け、学習内容の紹介に絞り込んだ。学習内容の紹介では、教科学習だけでなく、テストの復習、読書、日記など、どのようなことをすればよいかを、発達段階に応じて幅広く示した。これを自主学習専用の「パワーアップノート」に貼り、常に確認できるようにしている。

また、広めたいと思う子どもの自主学習の取り組みは、学年だよりで積極的に紹介すると、2学年担任で現職教育主任の須田礼恵（あやえ）先生は話す。

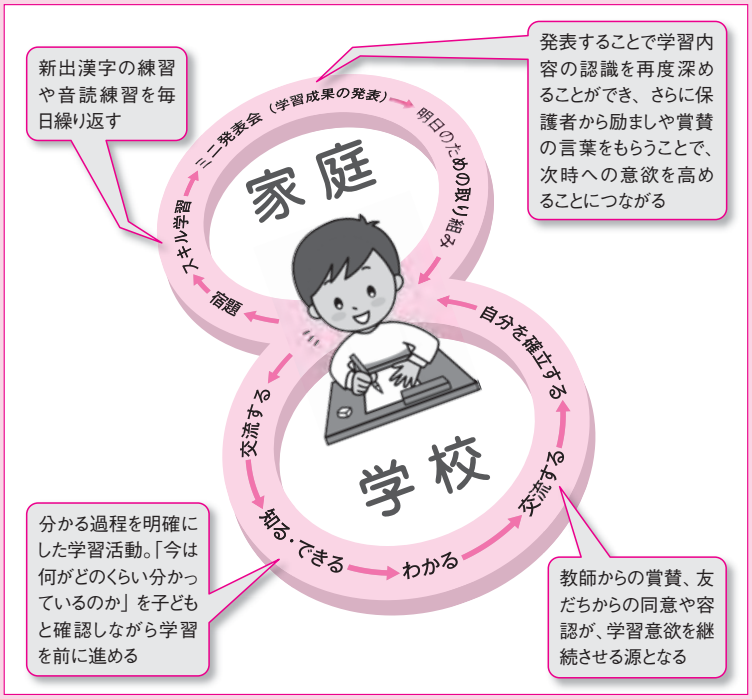
「友だちがどのように学習しているのかを知ることで、子どもは『自分も頑張ろう』と思うようになるはずです。また、保護者が掲載された実践を見れば、子どもへの具体的な声掛けに役立つと考えました」

夏休みの自主学習を充実させることに力を入れていることも、同校の特徴だ。

夏休み直前に行う個人懇談会では、保護者に夏休みの宿題を伝えている。与えられた課題にしっかり取り組む習慣を付けることが目標の1・2年生の保護者には宿題そのものを、自主的な学習意欲を伸ばすことが目標の3年生以上の保護者には宿題一覧表を渡して、毎日机に向かえるよう、家庭での声掛けをお願いする。

「個人懇談会では、子どもの頑張りと成果を認め、褒めてから、課題を伝えるようにしています。その際も、家庭に全てお任せするのではなく、学校で工夫していることを伝え、保護者の参考になることを意識しています。学校と家庭が両輪ではありますが、エンジンを掛けるのは学校だと思っています」（須田先生）

図1「8の字学習サイクル」活動の例（5年・国語「大造じいさんとがん」）



8の下部が学校、上部が家庭を表し、2つの交点に子どもが位置する。学校と家庭が両輪となり、子どもの学習意欲を伸ばす仕組みをつくるために考案した。「分かる」という喜びを感じられるような授業を行い、子どもが自発的に家庭学習に取り組めるようになることを目指している。「8の字」に入る具体的な活動は、学年や単元によってさまざまなバリエーションがある

＊同校の資料を基に編集部で作成

SCHOOL DATA

香川県高松市立川東小学校

◎1872（明治5）年開校。香川県中央部に位置する。伝統芸能「農村歌舞伎」体験学習を行うなど、地域と連携した取り組みが盛ん。2010年度、香川県の学力向上対策モデル校に指定されたのをきっかけに、子どもの学習習慣定着の取り組みを始めた。

校長　柾木俊幸先生
児童数　399人
学級数　15学級（うち特別支援学級2）
所在地　〒761-1706
香川県高松市香川町川東上1865-8
TEL　087-879-2012
URL　http://www.edu-tens.net/syoHP/kawahigasiHP/

高松市立川東小学校校長
柾木俊幸
まさき・としゆき
「知らないことを探究する楽しさを、子どもたちに伝えていきたい」

高松市立川東小学校教頭
亀井健男
かめい・たけお
「子どもも教師も集中して学習に取り組めるように、常に環境整備を心掛けている」

高松市立川東小学校
須田礼恵
すだ・あやえ
2学年担任、現職教育主任。「子どもと共に学び続け、成長し続けられる教師でありたい」

＊プロフィールは2013年3月時点のものです

更に、子どもが夏休み中の自分の生活を記録するプリントとして、1・2年生には「学習カレンダー」、3年生以上には「がんばり宣言書」（図2）を配布している。

「学習カレンダー」は、自主学習が出来た日は○、出来なかった日は×を記入する。「がんばり宣言書」は、まず1日の学習時間と起床・就寝時刻などの目標を書き、夏休みの最初と最後の1週間について、目標が達成できた日は○、出来なかった日は×を記入。いずれも、夏休み明けに担任が回収する。

努力する面白さに気付けば子どもは自ら学びに向かう

「8の字学習サイクル」活動を始めてから、自主学習に意欲的に取り組む子どもが多くなった。子どもへのアンケート調査では、「学校や家でこつこつと学習をすることができている」と回答した割合が、以前は61％だったが、12年11月には75％を占めるまでになった。

「子どもが努力することの面白さに気付いたのだと思います。『宿題だから取り組む』から『自分のために学習する』へと、意識が変わっていることを感じます」（亀井教頭）

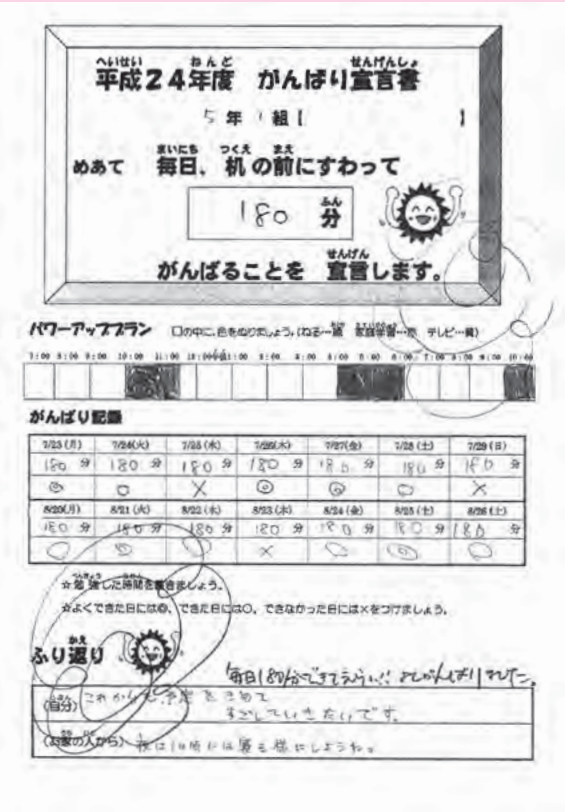
保護者の間でも、自主学習が話題になるようになった。

「学級懇談会などで、私たち教師が何も言わなくても、保護者から『もっと自主学習に取り組ませるために保護者として出来ることはないか』といった質問が増えています。保護者自身がかかわることで子どもの学習意欲が高まっていると、実感しているからだと思います」（須田先生）

柾木校長は、今後について次のように話す。

「学習習慣を育む取り組みを始めてから3年になりますが、徐々に成果が表れてきました。子どもの学力の根幹となる活動ですから、現状に満足せず、更なる向上を目指して、これからも先生方と力を合わせていきたいと思っています」

図2　がんばり宣言書（5年生）



最初に夏休み中の家庭学習時間を宣言。パワーアッププランに夏休みの基本となるスケジュールを記入する。その後、夏休みの指定期間に、がんばり記録に目標を達成できたかどうかを記入。夏休みの最後の日に、子どもが自分で振り返り、保護者にコメントをもらう

＊同校の資料をそのまま掲載

夏休み前の学級活動でお使いいただける副教材を無料でご提供します

未来に進むちからを育むプロジェクト。
ベネッセの学び応援

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2012年度は、のべ約15,000校から約138万冊ものお申し込みをいただきました。

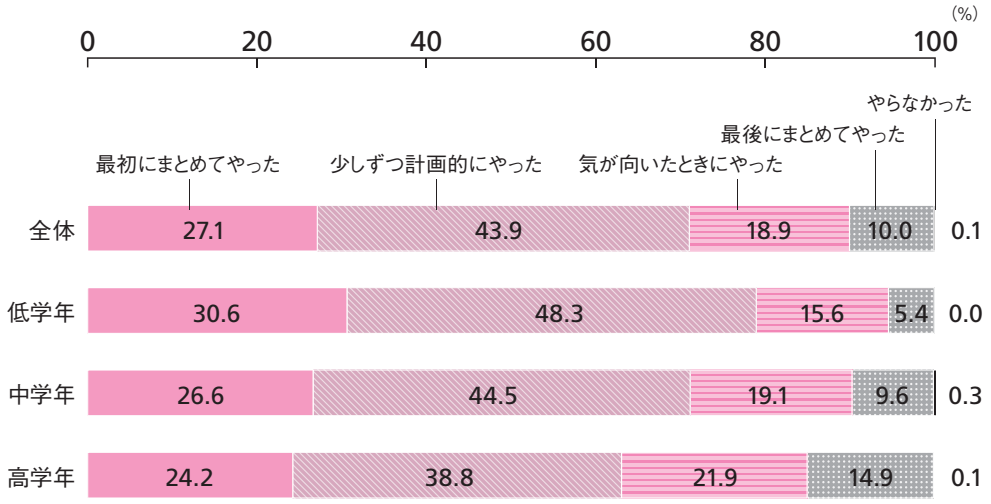
2013年度は、高学年の児童向けに、夏休みの上手な過ごし方を指導いただく際に役立つ副教材を無料でご提供いたします。夏休み前のご指導に最適なセット教材です。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。ただ今、申し込み受付中です。詳しくはホームページまたは本誌同送のチラシをご覧ください。

申し込み締め切り
2013年
7/12 金

学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ　http://www.benesse.co.jp/manabiouen/

夏休みの宿題は低学年ほど計画的に行う

夏休みの宿題をやった時期（回答：小学生の子どもをもつ母親）

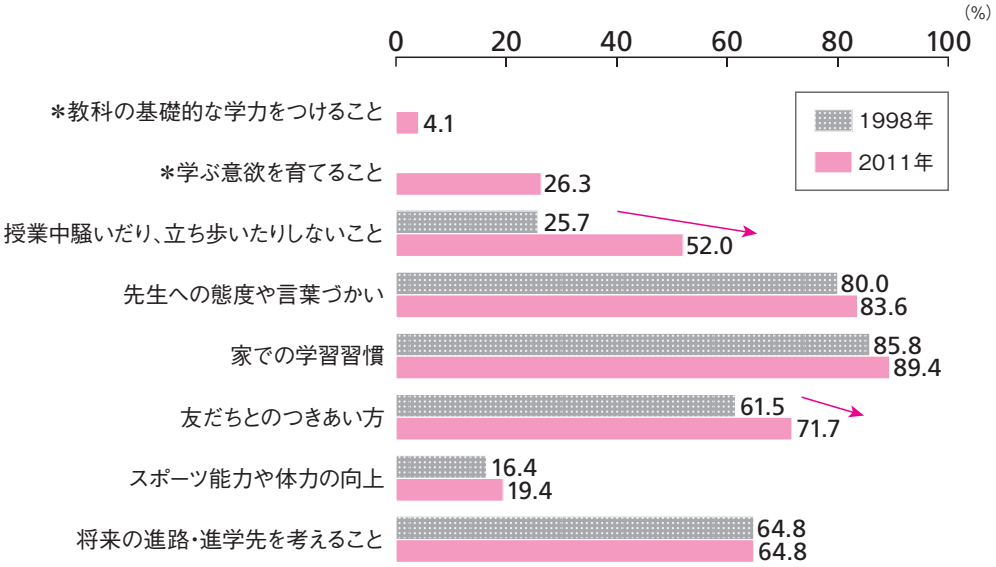


夏休みの宿題を「少しずつ計画的にやった」という子どもは、学年が上がるにつれて減少している。低学年は最後に宿題が残らないようにしており、高学年になるほど、「気が向いたときにやった」「最後にまとめてやった」という子どもが増加する

出典：Benesse教育研究開発センター「小学生の夏休み調査―小学生の保護者を対象として―」（2010）
調査時期は、2009年9月、調査対象は、全国の小学1年生～6年生の子どもをもつ母親4,644人（774人×6学年）、調査方法はインターネット調査

全体的に、家庭の役割と考える母親が増加

家庭と学校の役割（どちらかというと家庭が教育する割合）（回答：小学3年生～中学3年生の子どもをもつ母親）



経年変化を見ると、2011年のみの項目を除くほぼすべての項目で、「どちらかというと家庭が教育する」と考える母親の割合が増加している。特に増加が目立つのは、「授業中騒いだり、立ち歩いたりしないこと」と「友だちとのつきあい方」。学校での態度や、友だちとのかかわり方においても、家庭のしつけの範囲だと捉えられるようになっていることが分かる

注1）数値は「どちらかというと家庭が教育する」と考える割合
注2）＊印は2011年のみの調査項目

出典：Benesse教育研究開発センター「第4回子育て生活基本調査（小中版）」（2012）
調査時期は、1998年調査（第1回調査）は1998年12月、2011年調査（第4回調査）は2011年9月、調査対象は、1998年調査は全国の小学3年生～中学3年生の子どもをもつ保護者4,718人（うち分析対象は母親4,475人）、2011年調査は全国の小学1年生～中学3年生の子どもをもつ保護者8,079人（うち1998年調査との比較時の分析対象は小学3年生～中学3年生の母親6,020人）、調査方法は学校通しによる家庭での自記式質問紙調査

上記の関連データはコチラ！
http://benesse.jp/berd/
＊「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

読者のページ
Reader's VIEW

2012 Vol.4特集「学びに向かう力を伸ばす 新1年生指導」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎時代の流れとして、到達目標を設定し、それに向けて取り組むべき内容を策定することが多い中、上越教育大附属小学校は、「総合的な学習の時間」で「方向目標」を重視しているという話が新鮮でした。また、子どもがつまずかないことは大事だが、段差をたくましく乗り越えられる子どもを育てるという考えに共感できました。家庭や学力の実態調査と家庭への働き掛けは、すぐ取り組めそうな内容だと思いました。［北海道／M小学校］

◎保幼・小・中の連携はとても大切だと認識しており、本校でも、年３回の保・小連絡会を実施し、子ども理解や行事交流を図ってきています。しかし、１学年担任と保育士との研修になりがちで、学校全体としての取り組みには至っていません。そうした点で、品川区立第一日野小学校のスタートカリキュラムや、田川市立金川（かながわ）小学校の家庭との連携の取り組みが参考になりました。本誌を、保育士にも紹介し、更なる、保幼・小の連携の共通理解を図りたいと考えています。［静岡県／Ｉ小学校］

◎特集の総論で「小学校で学ぶことを前倒しするのではなく、あくまでも幼児期を土台として考える」という言葉が印象に残りました。１年生はついつい「また１から」という意識になりますが、それが大きなギャップになっているのだと考えさせられました。［和歌山県／Ｙ小学校］

◎昨今、若手教師をＯＪＴでどう育成するかが課題になっていますが、「私を育てたあの時代、あの出会い」に登場した池田悦子校長のように、かつては、力のある先輩から学ぼうとする、学校文化があったように感じます。今や、求めようとしない若手教師に、いかに研修意欲を引き出すかが、当面の課題だと思いました。［静岡県／Ｉ小学校］

◎「パワーアップ！授業研究」の市原市立京葉小学校の鎌田正男校長の「手の込んだ工夫よりも、すぐに生かせるような工夫を提案してほしい」という言葉が心に残りました。授業改善が目的のはずなのにその授業自体が目的となってしまっていることが多く、それを打破するための有効な言葉でした。［北海道／M小学校］

◎子どもの自己肯定感を高める必要性は分かっていても、実現が難しいと思っていましたが、「つながる学校と家庭の学び」で大淀町立大淀希望ヶ丘小学校の事例を読み、ささいな言葉や行動でも子どもは変わること、またその方法が分かり、勉強になりました。［鳥取県／Ｏ小学校］

ご両親を亡くされたお子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、〈ベネッセの通信教育サービス〉が全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください
http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/

◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ小学講座　0120-977-377（通話料無料）
＊一部のIP電話からは042-679-8563へおかけください（通話料がかかります）
＊受付時間10:00～20:00（日曜・祝日・年末年始を除く）

子どもは未来

Benesse教育研究開発センターは、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに
貢献することを目指しています。

Benesse® 教育研究開発センター『VIEW21』編集部

編集後記

今号では新連載「Benesse発 これからの教育」が始まりました。グローバル化、デジタル化など起こりつつある社会の変化を踏まえ、変わる小学校教育を「明日」の目線で伝えていきたいと思います。不易を大切にしながらも、未来に活躍する子どもたちにどのような教育が必要なのか、先生方と共に考えていきたいと思います。本年度もどうぞよろしくお願いします。（杉田）

VIEW21 小学版 2013 Vol.1　2013年5月20日発行／通巻第36号

発行人　岡田大介
編集人　谷山和成
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太
撮影協力　荒川潤、川上一生、谷口哲
イラスト協力　幸剛

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3391

©Benesse Corporation 2013